

やすいゆたか著作集 第二十六卷

やすいゆたか短歌集

「歌の栞」

哲学をつたふることの難ければ歌の栞を挟んでみるかな

首傾げ北の大地に独り立つ哲学の木よ空の青さよ



## やすいゆたか著作集 第二十六卷

### やすいゆたか短歌集 「歌の栞」

私の短歌は芸術としての短歌ではなく、要約や小見出しとしての短歌であり、表題短歌、「歌の栞」と言えるものが多いようです。でも中には胸を打つものも入っているかもしれません。それは作り手の力ではなく、読み手の感受性の問題ですね。評論や思想的な文章をいかに読みやすく、理解しやすくするか工夫であり、自分の個性的な文体を作り出す製品差別化の試みです。

歌の謂れが歌物語になったり、長歌の反歌に短歌をつけたり、物語の要約に短歌を使ったりするのは、日本文化の伝統ではないでしょうか。もちろん芸術性の高い短歌が詠めればいいのですが、たとえ拙い歌であっても、長い文章のテーマや狙いを歌にしておくという文体があってもいいのではないかと思っています。

中には歌が気になって文章が読みづらくなるとか、歌に制約されるといって批判もいただいています。短歌があるので、文章が難解でも何とか読める」ともあるというプラス評価もたくさんいただいています。

短歌を作り始めたきっかけは、全く不思議ですが睡眠中に歌が二つ、三つと突然浮びまして、それを書き留めました。ほんの二時間ぐらいいただけの歌を作れるなんて不思議ですね。ついでにその時に執筆中の文章の小見出しに歌をつけていきました。

収録した作品数は<sup>1034</sup>作品です。製作時期が不明確なものも多いので、途中から製作年月日順ではなくなっています。まだまだ未収録のものもあるのですが、時間に余裕ができたなら追加していきたいと思っています。ただし製作年月日が不明のものには重複しているものもあると思われます。

なおテーマ別に作品を分類するほうがよかったですかもしれませんが、そうなると大掛かりな仕事になりそうなので、一応製作年月日順にしました。

# やすいゆたかの短歌集1 100

二〇〇三年十一月九日(日)(五十八歳)

未明より突然歌心興り詠める歌十五首

- 1 誰一人吾を信じる人そなき五彩を纏いてただ一人舞う
- 2 哲学の道といえどもつづれ折り今絶壁に懸ける綱なし
- 3 吾が弟子に吾が肉吾が血を食へさせて復活の道拓きし人あり  
や
- 4 鉄の腕電子の脳で生まれても背負いし苦惱人に優れる
- 5 人間も神が作りし口ボならば、リヴァイアサンを人もつくらん
- 6 人間の間に答えは数あれど今この時の翼求めん
- 7 人間は思考なり人間は悲惨なり人間は交わりなり人間は範疇  
なり
- 8 青春の甘きすっぱき疎外論一度捨てたが又拾いきぬ
- 9 物なれど人の交わりなしたれば人と認めてなんぞはばかる
- 10 他人様の労働の実を取り持ちてトトははじめて人間となる
- 11 滅び行く森の哀しみ誰か知る人の心は天地の心が

12 考える事とは何か山海がその哀しみを語ることかな

13 草薙の剣を置きて吾はなし氷雨に打たれ露と消えゆく

14 突然に歌心湧きぬ朝ほらけ有明の月を賞でてみんかな

15 兼好をつくりみやびとけなしたる滅びの哀しみ知らざる人が  
な

梅原猛の生母千代の恋

16 吾が恋は命を賭けしまこと道、躬(み)は滅びても子供(い)の  
ち(守らん)

梅原猛の高校生の時の恋

17 大君の辺にこそ死なめ益荒男は、吾は恋路に死なましものを

十一月十日(月)

18 交換で人間となり言語生むその理(ことわり)は明かし得るか  
は

19 人間を問いしこの道四十年めぐりめぐりて太極に立つ

20 猪も月のものさえみやびなる歌の道こそたのしかりけり

21 切なくて涙あふるることもありわが身ひとつりの犯にはあれど

22 遷曆も間近になりて歌心何故に興りぬ命咲せむ

23 人の世に熟あれよとは語れども、躬のふがいなき胸塞がるる

24 哀しみの涙の海を胸に秘め命の愛しさ語る人かな

25 草麻生を抱きて立てるその母は命短く湖の祈り

26 命さえ惜しからざらし恋故に生まれし吾も恋に死なまし

十一月十一日(火)

娘愛の三十歳の誕生日(十日)に寄せて

27 クルクルと回りまわりて踊りたる愛しき姿今も夢見る

28 一日にハコマこなし帰る日は疲れにまけて歌も湧かずや

十一月十二日(水)

29 ルネサンス、ギリシア・ローマに憧れて咲き誇りたし人の悦び

30 モナリザの永久の微笑み投げかけてタ・ヴィンチはなお今を生  
き抜く

アルベルティ

31 いたずらに時を空費するなかれ、人は仕事のために生まれぬ

エラスムス

32 キリストの平和の教え忘れしか、鎧兜で先駆けし法王(きみ)。

十一月十三日(木)

マキヤベリ

33 君なれば狐の如くにずるくあれライオンの如く凶暴であれ

パスカル三首セット

34 考えることで無限を知りしより、わが身の悲惨迫りておののく。

35 無限にてわが身を包む宇宙をも吾の思考は包みて優れる

36 宇宙(そら)よりも偉大な吾を吾が神(ちち)は見捨てたまわ

じ偉大なるゆえ

ルター 免罪符反対

37 免罪符買いて御国に入れるならチャペルの力神に代われり

ルター 『キリスト者の自由』

38 信仰で救いを得たる者ならば救いのためになすことぞなき

表題短歌の心得

39 すくれたる歌を詠まんとするなかれ、つたなく歌うが歌を生む  
要領(二)(一)

梅原猛 『ギルガメシュ』に寄せて

40 四足を二つ足にて立たせしは退屈しのぎの神の戯れ

41 はてしなき天上にすむ神々を宮に閉じ込め奴となしたるや

十一月十四日(金)

『梅原猛 その哀しみと夢』 プロローグの小見出し寄せて  
「嘘偽りのない社会」

42 親子にまさか偽りあるうとは、父が伯父にて叔父が父とは

トーマティズムと往還思想

43 あの世界では人のこの身が熊になり、あの世界の熊がこの世で人か  
は

十一月十五日(土)

縄文時代のあの世界説への疑問

44 さかさまの他にはこの世と変わらぬ世といえど腹はす  
くぐり

25 草麻生を抱きて立てるその母の髪尖りたり湖の祈り(訂正)

あの世界を含む生命の共生と循環

45 大いなる命の輪にて共に生く、その理を胸に生かまし

一神教と多神教の対話の可能性

46 一と多の溶け合いてこそ叶ひたる命の法(のり)に変わらぬも  
のを

聖徳太子信仰の復興

47 和の国の栄えの基示したる憂いの御霊嘆き聞かじや

宗教と道徳の教育

48 命をも捧げし愛に護られし君が力に限りあらむや

第一章 梅原猛の生い立ち 野合の子

49 病得て生めばわが身は朽ちるとも愛の誠の証し護らん

町の最後のダンナハン

50 内海町町の最後のダンナハン養父(ちち)の大きさ享けて花咲  
く

養母俊は小説家小栗風葉の妹だった

51 風葉のやくさな暮らし語る養母(はは)春のときめき胸に響け  
り

梅原猛の神童伝説

52 関取の足指だけで名を当てる神童の子の心淋しき

一人遊びの少年時代

53 ただ一人野球将棋に籠もりたる生まれの秘め事ふれまじたれ  
も

秀才から文学青年へ

54 魔につかれ小説書きに溺れたる才なきものを止められもせず

戦火の中の青春

55 ますらおの美しき死に縁なきやゲートル巻けず剣でなへられ

十一月十六日(日)

西田幾多郎の「死して生きる」

56 「死してこそ真に生きる」といふ真(まこと)は、いかにたらく時局の中で

高山岩男の『世界史の哲学』

57 若き血を流して死なむそのために胸に抱けり『世界史の哲学』

大学に戻って

58 戦より戻りて哲学せむからはなごて語らぬ己の言葉で

私の恋愛観―その悲劇性について―

59 砕け散る恋ゆえにこそ我を知る燃ゆる想いは恋ならなくに

「死の哲学」を求めて

60 死を求め死の哲学に惹かれたるその奥底にタナトスの母

ベサリウス『人体構造論』

61 獣とは体に違いなきものを如何でひらきし文明の扉

ペーコン 劇場のイドラ

62 信じるな、いかに権威があるつとも、実験してみて確かめぬうち

デカルト 方法的懐疑

63 疑いて疑いてなお疑えぬ疑っているこの我のみは

十一月十七日(月)

稲垣ふさとの結婚

64 いかにして石鱗多く掴まんか夜を徹してのそれが問題

引用のない論文

65 自らの闇のバトスに迫れるに権威(ひと)の言葉は借りまじきかな

希望の裏に不安はひそむ

66 未来へと希望を託すその裏に不安潜めりふがいなき躬(み)の

忍びよる憂愁と焦燥

67 しのびよる憂いと焦り吾にあり確かな実り未だ遂げれず

存在の引き裂かれる痛み

68 ありたいと願う吾とは程遠く引き裂かれたる存在の痛み

不安を眠らせるための三つの態度

69 ニヒルなる素顔の上に被らせた笑顔の仮面肌に喰い込む

閉ざされた部屋・絶望

70 あの世へと望みをつなぐ術もなし、神無き時を生きる吾等は

十一月十九日(水)

絶望からの逃走の試み

71 己(まこと)下らぬ奴は他になし犬に食われて死にたきものを

誠実に生きるとき絶望は必然である

72 絶望が生み出した虚無その上に物質的言(も)を積み上げそれを神とす

「生と死の転換(ヘラクレイトスの断片をめぐって)」

73 竜谷大極楽浄土に近かけれど念仏唱えて腹はふくれめ

我々はかのもんらの死を生きる

74 土と水、魂の火よ、めぐりめぐれよ、相手の死を生き

すみきった流転のロゴス

75 すみきった流転のロゴスさとりなば土や水さえ命なりけり

十一月二十一日(金)

「笑いの哲学」から「日本文化論」へ

76 生活はなるようになる、腹括り笑い飛ばせば力湧くなり

禅偏重の日本文化論

77 西行の歌は禅より前に出ずその自然愛禅に劣るや

和辻哲郎と天皇教

78 祀る神無の主体なる天皇に、祀られてこそ神になるとは

丸山真男の宗教的痴呆

79 大乘の教え背骨に通じたる否といつまじ読まざるうちに

『地獄の思想』はじめに

80 地獄こそ口が住処と悟りしかその心には涙の海あり

釈迦と六道輪廻

81 釈迦牟尼は、無我の真理とサンサーラ、アンチノミーに苦悶したるか

天台智顛の思想

82 わが心三千世界さすらいぬ三体円融ものあはれや

源信『往生要集』

83 死してなお地獄の苦しみあらむとは死んでも死なぬ命なるかな

法然の専修称名念仏

84 罪人の為こそぞされ阿弥陀仏過ち悔やむも已卑下すな

十一月二十二日(土)

念仏為本から信心為本へ

85 わが妻はわれを救える救世観音御身なしでは夜も寝られず

悪人正機説

86 御仏に頼む心の切なれば悪人救うが弥陀の本願

自然法爾

87 ひたすらに南無阿弥陀仏称ふれば現世地獄も弥陀の浄土か

「二種回向論」がなかった

88 現身の地獄の苦しみ語れども後の世のこと思はざりしか

源氏物語の美学

89 源氏にぞものあはれはきわまれり三休田融大和心か

六条御息所の地獄

90 夢にだに思はざりしか汝が霊が恋敵(かたき)の首を締めに行くとは

阿修羅の世界―平家物語―

91 六道のすべて巡りてたどり着く終の棲家のしずかなるかな

妄執の霊ども―世阿弥

92 打ちたれど響かぬものか綾鼓嘘で飾りてこころとてなき

十一月二十三日(日)

死への道行き

93 道行の白き道こそまことなれ極楽浄土に続く道かな

宮沢賢治の修羅

94 この人も賢治とともに歩めるか春と修羅との命の道を

太宰治の道化地獄

95 命かけ酒に女に革命にのめりこめずに人が見えるか

『隠された十字架―法隆寺論―』怨霊信仰について

96 怨霊の祟りをおそれ祀りたるその心根は和の精神(こころ)かは

梅原猛と怨霊信仰

97 未生怨持ちて生まれし人故に時をはじくか怨霊の声

山背大兄皇子と入鹿殺害のシナリオ

98 山背の仇討ちたりと入鹿首掲げし鎌足許すまじきや

死霊の復讐 鎌足の死

99 「打橋の集楽(つめ)の遊びに出でませ子」皇子よ行かまじ死霊の誘い

死霊の経典講読

100 経典を講読しつる僧の目に妖しき光宿りまつるや



# やすいゆたか短歌集 101〜200

日食シヨウに寄せて

101 君見すや世話になりたる日月がびづくしのタイヤリングを

十二月五日(金)

スーパードラゴン王様と恐竜に寄せて

102 某は神かもしれぬとトットラー、力に溺れり失う

103 世の中にこれで買えないものはなし、金を抱きてトットラー微笑む

104 文句あるそれなら一発お見舞いと、こきげんトットラー 水爆撫ぜ撫で

105 結局は、勝てば官軍その後で正義はもじもじついてくる

106 水爆とカネさえあれば大丈夫、正義の理屈はどうとでもなる

107 正義持つ国に逆らう国あらばつちてしやまむ正義のため

108 一週間あれば済みます爆撃は、敵の心(しん)しく(つく)ンポイントで

109 え 探しても見付からぬのは何ゆえか、見付からぬよ隠したるゆ

110 曖昧で言挙げせぬは月の国、さねど出します国際貢献

111 人間は恐竜なるか現し世の、破壊し尽くし、仲間食ひ合つ

自衛隊のイラク派遣に寄せて

112 米兵もエスケープする戦場になどて出かける自衛の隊員

十二月六日(土)

便秘に寄せて

113 このウンチ身を擦じらせて気張り出すその力(りき)あらばな  
お一日を

十二月七日(日)

昨夜忘年会での梅原猛

114 驚けり我に代わりて歌詠める人は君だけ御大破顔

十二月八日(月)

法隆寺と死の原理

115 死を意味す、偶数で建てるその理由(わけ)は、怨霊封じ、他に何ぞや

薬師如来像と釈迦三尊像

116 釈迦なれど僧衣まとわずおわします、その本心は太子祀れり

極楽往生の場所

117 いでまじき閉じ込め祀る御寺こそ御仏います往生楽土よ

十二月九日(火)

夢殿救世観音像の謎

118 太子骨持てる観音厨子の中布巻かれたり五百ヤードの

怨霊の狂乱の舞

119 狂乱の舞を舞たる聖霊会時をはじめて太子現る

「パス」人間記号論の試み』について」に寄せて

ホップズの意義と限界

120 集団を人と捉えたホップズもそこに事物は加えざりしか

身体主義的人間観の克服

121 人間をその身体に定めたる人のために挑み得るかは

パス」人間記号論の試み』

122 同義だと人と記号を結びたるイコールの文字輝けるかも

123 考えるプロセスがある、その外に考える我あるのではなく。

124 ものありてものを指すのが記号なり。記号の過程が思考なりけり。

125 思考するそのプロセスが人ならば、人は記号とパスというなり。

126 経験に現れるのが物ならば、物なくしては経験もなし

127 真理とは、知りたる意識と実在が一致すること科学なるかな

128 物ありて姿現わすそのことと思考すること一つなるかな。

十二月十一日(木)

柿本人麿も怨霊だった？

129 歌聖よと敬われたる人麻呂が祟りを起こす怨み霊とは

十二月十二日(金)

斎藤茂吉と賀茂真淵

130 人麻呂の籠もれる思いを明かさなむ、茂吉・真淵も弾け散らむ

鴨山を求めて

131 「高山」とその一言で決めたるに「磐根」のみでは「こる落ちざり

五首一組の哀歌 人麻呂の水刑

132 潮引きに大きな岩に縛られて、潮満ちくれば首隠るかも

十二月十三日(土)

柿本人麿の地位と正史の記載問題

133 何故に人麻呂「死」とは記されぬ、正三位なら「薨」なりぬべし

134 刑死ならたとえ三位に列なれど、位奪われ、「死」と記されぬ

ヒトがサルで、サルがヒトである。

135 人麻呂よお前はなんと人でなし、サルと名乗りて去るにしかずや

十二月十五日(月)

136 何時の日か朝日歌壇に吾歌が載せられるなど夢のまた夢

十二月二十日(土)

聖武天皇の逃避行

137 フセイン元大統領拘束の知らせに寄せて  
ただ一人追い詰められて穴の中暗闇見つめ炎念(おも)ふや

144 御仏の国土となさむこの国は、朕(わ)が意を写す皇国(すめらみくに)ぞ

十二月十六日(火)

妻の五十八歳の誕生日に寄せて

138 わが父が遣せし書の道引継ぎて輝ける妻、誇らしきかな

145 孝謙上皇と道鏡―聖と俗のアンビバレンツ―  
命賭け聖きを汚し奉る孤独地獄の君救うべく

十二月十七日(水)

『水底の歌』と梅原哲学

139 人麻呂は怨霊として働きて和歌を文化の華とはなせり

146 梅原猛の縄文文化論 1母なる縄文文化  
わが母がわれを生みにし東北に還りて偲ぶ縄文の時

十二月十八日(木)

髪長姫伝説

140 霊験で得たる黒髪長けれどその幸せは短かけるかも

147 2アイヌ学の師、藤村久和との出会い  
その人はコタンのアイヌに成り切りて霊の往還あつく語りき

首皇子と安宿媛

141 君がため惜からざらし命なり胸焦がれたる恋にはあらねど

148 3アイヌ語と縄文語  
アイヌ語に縄文の日の言の葉の名残偲はむ忘却のむじろ

十二月十九日(金)

持統天皇の心の闇

142 すめろぎの心の闇をたれか知る時を盗めりかの人こそは

149 4イオマンテと往還の思想  
満月にマレフト送るかがり火よ何時の日にかまた帰り来よ

中継ぎの女帝たち

143 天皇(すめろぎ)は蘇りしか燦さめき、鷗野とみまじり阿門の

150 穴の中の哲学者 「吾輩はムツゴロウである」第一章  
ムツゴロウその名で呼ばれし人なれど声もあげずに見殺しきなり

十二月二十三日(火)

皇女(ひめみこ)

151 夢の中ムツロウにぞなりたるか夢の中にて梅原なりや

152 浄き国入らむがためにムツロウ惜しまず棄てしか美大なる身を

十二月二十八日(日)

5 縄文土偶の謎

153 子を孕み身罷りし女傍らに瞳孔開けり土偶寄り添う

二〇〇四年 元旦(木)

154 暗雲の迫れることき新年に我は身構え伸びむと願う

6 真脇遺跡とイルカのイオマンテ

155 御柱を巡りまぐわひ霊送る真脇の浜のイオマンテ幻視(み)ゆ

7 異界に送るものー火

156 霊送り霊迎えたるかがり火よ哀しみ燃やし命謳(うた)ふや

8 鳥と共に海を渡れ

157 魂は鳥となりて海渡りニライカナイに夢を結ぶや

9 熊は果たしてあの世で人間の姿をしているか

158 霊が皆人の姿をせしならば異界はこの世と似ても似つかぬ

10 アイヌと縄文人の宗教観

159 死して後行く世界をば何と見た霊ばかりなる世界なりしや

11 往還の思想から二種回向論へ

160 異界との霊の往還包みつつ命の循環解き明かしけり

梅原猛の哀しみ

161 信仰はおさえ切れない哀しみが夢の姿をつくりしものか

法然の出家

162 叡山に入山決まる少年に父は頼めりわが身の菩提

観想念仏か称名念仏か

163 万巻の経を読めども甲斐無きや南無阿弥陀仏の六文字にしかず

仏の本願に望むれば

164 御仏の姿を観るが修行では南無阿弥陀仏で民は救えど

一月三日(土)

民衆の信仰として

165 煩惱に悶せる衆生(たみ)を救ふには弥陀の願ひに頼るにしかずや

「専修念仏」の問題点

166 恐ろしき教えならずや念仏は行も経も坊主も要らぬ

叡山と興福寺の法然弾劾

167 称名の道を扱ばば叡山も南都の寺も露と消えなむ

安楽・住蓮事件

168 念仏を唱えしゆえに殺さるるこれに優れる喜び無きかは

悪人正機説と女人往生論

169 いとほしき女(ひと)の最期は看取らねど同じ蓮にて生まれまほしや

一月四日(日)

170 哲学の生(なま)の現場を見せむとてホームページに網張りてみる

人間学四十年

171 人間の間に魅せられ四十年何故人間か自問自答す

一月五日(月)

第十一章『湖の伝説』母の大きな手

172 草麻生を抱きし母の大きな手、その足元に斃れし白鳥

生みの母の記憶

173 生母への想いを消せりひたすらに節子の愛と死芸術見つめて

物語絵の芸術性

174 異なる時を一つに構成す物語絵は時をはじけり

田鶴来

175 射落とした鶴の骸に首二つ、夫の首を抱きて飛びしや

三井の晩鐘

176 いとこ子に田井江えしその母は池の底はひ晩鐘を聴く

鷺の恩返し

177 命賭け恩を返せし鷺ならば無力なれども想いとどけり

死して生きる

178 命賭け事を行う意気なくば人の心に届くまじきを

花折峠

179 哀しみを突き抜けてこそたどり着く涅槃の死の絵されどぞみを

紙芝居『雷のいない村』

180 草麻生に愛と勇気を伝えたる節子に重なる千代の哀しみ

母への回帰と信仰の変化

181 亡き母を取り戻したき思いなお激しくなりぬ熟してもなお

「専修念仏」から「二種回向」へ

182 親鸞の哀しみなるはそもなんぞそこから出でたる二種回向かな

一月六日(火)

第十二章梅原猛の『ヤマトタケル』

スーパ―歌舞伎の誕生

183 けれども心捉える歌舞伎にも胸迫り来る金のせりふを

梅原猛とヤマトタケル

184 猛こそタケルに似しやただ一人權威に挑みてひるむことなし

ヤマトタケルの時代

185 大王にまつろはぬ民数あれど草薙の剣たむけやはせむ

小碓命の兄殺し

186 兄殺し命をかけて尽くしたるその真心を父よ知らじな

小碓命、女装して、熊襲タケルを倒す

187 タケルなる強き男を倒すには弱き女子に成りて虚をつく

戯曲ではカットされた出雲タケル征伐

188 友と呼び木刀与えてだまし討ち父王の嘘皇子も受継ぐ

一月七日(水)

小碓命の生還と蝦夷征伐命令

189 兜脱ぎくつろぐ暇もなきものか、蝦夷討てとは死ねと言つこと

草薙剣

190 草薙の剣が皇子を呼び寄せて、荒ぶる舞いまふヤマトタケルの

倭の論理と蝦夷の論理

191 戦にてたとひこの身は朽ちるとも山野を守る心朽ちまじ

一月八日(木)

滅ぼされた側の論理

192 森壊し、海を汚して拓け行く、文明の果てに瓦礫の山あり

弟橘姫の入水

193 燃ゆる火の恋にしあらば君が為吾が命さえ捧げまほしを

襲の裾に月立ちにけり

194 血のにじむ想い重ねて君待ちぬ裳の裾にまで色にいでしか

嬢子の床の辺に

195 まくわひの嬢子の床はめくるめく剣忘れて山にむかいぬ

息吹山の山神

196 積年の恨みの的に山神は身を弾にして碎け散るなり

大和し美し

197 美しき大和の国へ帰らばや雲立ち上るは吾家の方や

更に天翔りて

198 白鳥は更に何処に天翔ける、その後追いて嬢子かけるや

第十三章『オオクニヌシ』

平和憲法とオオクニヌシ

199 丸腰の国をつくりて滅ぼさるそは罪なりや誓なりしか

200 因幡の白兔  
傷負える兔たすけてオオナムチ因幡の国の君となりしが

やすいゆたか短歌集 201 ~ 300

一月九日(金)

オオナムチの死と復活

201 飛躍して強くなりけりオオナムチ、死にうちかちて蘇りし後

黄泉の国のオオナムチ

202 スサノオの髭を柱に括りつけ逃げ出しにけり、黄泉の国から

一月十日(土)

オオクニヌシの誕生

203 大いなる和の国つくらむもるともに、愚かなる吾助けよもろびと

葦原色許男

204 醜男が皺を重ねて磨かれて呼ばれけるかな葦原色許男

スクナヒコナと平和国家建設

205 国破れ海を渡りし皇子なれば、平和で豊かな国築きたし

建国三十年記念式典

206 寿ぎの杯上げん肇国の三十路の年の栄えの式なり

ヤガミヒメとの再会

207 純愛の想いは消えず永久(とこしえ)に吾をこがるや初恋の女(つづ)

国譲りの神話

208 豊なる国を築けるそのあまり守りの備え緩みたるかな

出雲大社の建立

209 怨霊を鎮める為に社建て守りの神と祀りけるかも

一月十三日(火)

210 一合の真澄を夫婦でわけて飲み、仕事残して眠りたるかな

一月十四日(水)

陽明学

211 庭前(にわさき)の竹の切先にらめども理は現れぬ七日経ても

212 義を生きて毒蛇の獄に繋がれど挫けぬ心に理は見出せり

ムツゴロウ

213 贖いのクロスに骸括りつけ許しを乞うやムツゴロウ教

214 珪藻を食べて生きたりムツゴロウ何故ありて刑せらるるや

ヘーゲル、即自・対自・即且対自

215 生まれでて心のままに生きたれど己知らねば即自なりけり

216 挫折して己を問いて悶えたる、その姿こそ対自なりけり

217 世の中で己を生かす道知りて自由に生けるは即且対自か

ヘーゲル弁証法、種の例

218 種なれど種のままにて終りなば種も仕掛けもあらぬなりけり

219 種なれば己の中に種ならぬ否定宿せり、それで芽が出る

220 芽の中に種と否定を保ちたり、それ故にこそ終に種なり

221 始まりも終りも同じ種なりき、端緒に還りて円環を成す

一月十九日(月)

第十四章 『ギルガメッシュ』 戯曲『ギルガメッシュ』の文学性

222 文明と命の意味を問い直しギルガメッシュは今日も悶えり

三分の二が神、三分の一が人間

223 大いなる命の声に我忘れ、発情すること筆をとる人

エンキドゥの誕生

224 エンキドゥ、奢れる君と戦いて人の力の限り明かせよ

奥処を開き、息を捕らえよ

225 獣なる男を捕らえて人とする役目になつは女にしかずや

エンキドゥ 対ギルガメッシュ

226 戦いに疲れて男は座り込み涙流して抱き合ひき



森の神フンババ

227 今日もまたギルガメシュとなりフンババを殺し殺して命削れり

森の戦い

228 森の木と獣たちとの敵となり戦い挑みぬ命のもとに

一月二十二日(木)

神殺しの罪

229 神を生むその心にぞ神殺す心潜めり人の性(さが)かは

一月二十三日(金)

ギルガメシュの旅立ち

230 吾が愛(かな)しエンキドゥは土くれやそが定めなり吾また同じや

一月二十四日(土)

死者の国にて

231 攻め取りてたとひ善政おこなへどその民草の怨みかさめる

父母の死霊との出会い

232 ゆるされぬその恋証し生まれこぬ吾は背負つや不孝の罪を

エンキドゥは恨んでいた

233 死に人の霊の世界をさまよひて人の心の沼の底知る

不老不死の妙薬

234 悪魔にも神にも勝ちしヒーローも太刀打ちできぬは眠気なるかな

一月二十五日(日)

ギルガメシュ王の帰還

235 死霊住む果てなる国より還りきて神にわびつつ命はてなむ

多忙とスランプで歌が詠めない日が続く

二月十二日(木)

『およつとの尼』あらすじ

236 尼なれど世の荒波を渡るには金にも色にも欲(おも)ひつきまじ

およつとの尼の恋

237 還暦を過ぎて余生となりぬとも生きる証しぞ燃ゆる想いは

およつと猛の養母

238 梅原におよつと後はタフルやと尋ねてみると大爆笑なり

三月二十七日(土)

終章 人類哲学の創造へ

239 大本の命の環にぞ還らなむ、光輝く創造の海へ

事的世界観・事的人間

240 各刹那命はじけて碎け散るそのインパクト命また生む

241 梅原の存在自体事件なり、ワクワク待ちぬ次は何かと

感情による歴史認識

242 感情を入れ込んでみてその人の苦しみ迫ればリアリティあり

循環の哲学

243 大いなる廻り廻れる命の環彼方の岸を含みて廻れや

共生の哲学

244 共に生き、共に栄ゆるそのために、共に苦しむ心忘れめ

宗教的対話

245 大いなる命の底にまばゆくも愛の光はさしきたるかな

和の論理

246 お互いに凡夫なれども智慧集め力合わせて稔り豊かに

四月五日（月）

青年期の課題と自己形成

247 十七の吾は未来を指差して吾がものなりと豪語したりや

欲求・自我防衛機制

248 無意識に自分を守るそのためにいついてしまつ哀しき性かな

性格・生き方

249 奥底で天使と悪魔バトルする心の修羅は知られまじきや

「倫理」と「哲学」の意味

250 輪になりて生きる理（ことわり）示したる古今の人と苦惱分かつむ

251 無知なれど真求めるパトスの火ドクサ燃やしてスタートに立つ

四月八日（木）

252 ミュトス（神話）からロゴス（論理）へ、悲劇『オイディプス王』

人の道踏み外してぞ見据えたるその闇こそは神も侵せじ

ミレトス学派

253 何処より来りしものぞわが命、いすこに還り、廻り廻るや

調和と闘争

254 戦いか調和かいずれ原理なる議論戦い調和せざるや

有るものは有り、有らぬものは有りぬ

256 有るものは確かに有りて、有らぬもの確かにあらねど、その帰結とは

四元論とアトム論

257 コスモスはアトムとケノンそののみか意味・価値・目的いづくにあらむ

四月一〇日

ソフィスト

258 物事の真は何と問うたれば人それぞれと答えしは誰

259 たとへ身ははかなき露と消ゆるとも遺せし文化(もの)に命燃ゆるや

260 崩れゆく高層ビルの姿こそ、人間の今、断末魔かな

261 亡父(ちち)の書に今も命は躍りたる、書こそ父の命なりしか

四月一五日(木)

ソクラテス

262 無知の知を生むは問答産婆術鞭の血よりも苦しき術かな

プラトン

263 哲人が理想の旗を振りかざしポリス導く王となれかし

264 予め頭の中に知の大樹ありて始めてものを知れるや

四月一七日(土)

天地創造と神の言葉

265 闇照らす命のロゴス紡ぎ出し神は造れり愛のコスモス

光と闇

266 存在の底にありしはアガペーか愛に生きてぞ命輝く

神の為の人間、人間の為の神

267 人間を造りし神を造りしは人にあらずや神にあらずや

268 人間を造りし神が愛ならば人間の為あるが喜び

四月一八日(日)

アリストテレス1 エイダスとピュレー

269 青年は未来を宿すデユナミスか、己を信じて、学べや学べ

アリストテレス2 徳と幸福

270 幸せに生きる人なり何事も行為自体を楽しむ人は

アリストテレス3 ポリス的動物と正義論

272 相議して作りし法を守り抜く、そのことなしに人間もなし

ソフォス(賢人)の知

273 樽の中住める棲家は狭けれど心は広き足るを知りなば

エピクロス学派 パンと水の快楽

274 パンと水楽しき語らいそれだけで肉や魚は要らざるものを

四月二四日(土)

ストア派 禁欲主義と自然法思想の源流

275 大いなる命と理性解き明かすストアの思想人よ忘るな

四月二十五日(日)

エコロジの問題

276 山愁い海哀しむやこの胸に溢る嘆きよ天地の心

人間対動植物、そして魂の不滅について

277 塵ならば塵にかえりて元々か、生きてるだけで丸儲けかな

エデンの園

278 命なる智恵なる二木取り囲みエデンの園に時は定めり

中東紛争に触れて

279 崇めたる神に違いはなけれども和解は遠し、重なる怨みに

ユダヤ教

280 万物を創りし神は唯一つその名告げまじ僕(しもへ)の躬(み)ゆえに

281 アブラハム、神は全地を約したり、イスラエルこそ栄光の民

282 土塊や獣を神と崇めたる冒流の民撃ちてしやまむ

キリスト教

283 救われる為にトラー守りたるその心根に罪は宿りぬ

284 聖霊を宿して悪霊払いたる技冴えわたりその名とどろく

285 人々の罪を背負いて贖罪のクロスにつけり蘇りしか

マルクスの人間論 労働本質論は棄てられたか

286 本質は内に住みたる抽象が関わりの中現捉えよ

疎外論の払拭について

287 疎外論あるべき姿論じたり、歴史は生のせめぎあひかな

労働と疎外

288 労働は己の力物にして示したること喜ばしきや

289 対象の中に己を喪したり、働くことは疎外なりしか

非有機的身体と人間的自然

290 わが心天地の心と一つなり、天地は我の五体に近しや

キリスト教の成立

291 死に克ちて蘇りにし人の子は天に昇りぬ、再臨は何時(いつ)

292 いとし子をクロスにつけて示す愛、それに応えぬ人に裁きか

293 愛なくば山を動かす信仰も無に等しきや、神は愛なり

キリスト教の発展

294 ペルソナは異にすれども父と子と聖霊なる神一つなるらし

『資本論』における価値ガレルテ論

295 労働が膠になりてとりついて物を価値だと誤たせしとは

『資本論』の人間観の限界

296 雇われて働く者のみ価値を生む、一点張りでは視界狭めり

297 人間は身体のみ存在か物の中にぞ己見出す

七月三日(土)

ベサリウス『人体構造論』

298 その中身ひらいてみればわかりなし人も獣も五臓六腑が

デカルト心身二元論

299 人のみぞ巧みに言葉あやつれり身体機械に魂足せりや

ホッブズ人間機械論

300 魂を置き入れずとも音声記号となりて言葉生まれぬ

やすいゆたか短歌集

301  
〜  
400

梅原猛は「海」である

301 大いなる哀しみ抱く母抱き海は語るや命の意味を

賢治の詩と『法華経』的世界観

302 この刹那悠久のときらめきて空一杯の孔雀羽ばたく

循環と共生そして「ポラーノの広場」

303 舞い踊り歌い明かせやポラーノの宴の空に哀しみの星

大宰治の道化地獄

悪いのはお父さん

304 葉ちゃん神様みたいにいい子なのただ悪いのはお父さんなの

俺を認めてくれよ

305 俺だつて工夫してんだ本当に認めてくれよ少しでも

自殺の年譜

306 死にたくて死にたくてなお死にたくて幾度死んでもなお死にたくて

イスラム

307 イスラムの教えは厳しひたすらに神を信じて吾が子掘くや

308 はるかなるメツカを目指す巡礼の旅の空舞う禿鷹の群れ

対談 人間論講座

309 や ゴキブリが知性体へと進化して殺人剤でヒトを駆除(ころ)す

310 たとえ身は鉄や鋼で成りたれど胸に燃ゆるや恋の炎も

311 身は機械なれど魂宿したる、置き入れたるは神の御業か

312 欲望で動く機械にかわらねど言葉操る術(すべ)ぞ習ひし

313 戦いで共倒れする愚を覚り、リヴァイアサンを人はつくりぬ

314 機械なる人が集まり作りたるリヴァイアサンも機械人間

315 造りぬ 神々は自分の姿にかたどりて、アタマ(土)の塵でアダム(人)

316 骨、イシュ(男)の骨、イシャー(女)と成りて現れぬ、吾が骨の  
吾が肉の肉

317 姿見て声を発して名付けたり、そは言の葉の初めなるかな

318 アンニユイをかこちて人は欲望の黒きとぐろの蛇を宿しき

319 楽園を追われて人は鋏を持ち土にまみれて命削るや

320 労働は神が下せし労役か塵に戻りて果てる時まで

321 直向に時は流れぬ罪を得て追われし日より終りの日まで

二〇〇四年九月一日

インダス文明滅亡

322 ドラヒタの民が築きし文明も森の怒りに触れて滅びぬ

梵我一如

323 吾が魂とコスモスを成す本体と一つなることいかで悟らむ

324 プルシャからコスモスすべて生まれきぬ星見る時に吾は星な

り

四門出遊

325 苦しみのはてなき旅と知りたれぞ果てなむ際には恋しかるら

む

怨憎会苦

326 今日もまた吾を譏りし人に会うときめく人には会えざるもの

を

求不得苦

327 求めてもついに得られぬ苦しみを積み重ねてどきいぬるもの

か

初転法輪

328 哀しきは飢えたる虎か生きむとて人の肉さえ喰らいし人よ

我執

329 苦しみのその源をたずぬれば我に拘る心つすけり

縁起の思想

330 綾蘭笠探しているうち日が暮れて白髪かきて闇をさするふ

331 縁に触れ全ては起り滅するや生まれし身ゆえ死なざるはなし

四法印

332 うたかたは刹那に結び消え去りぬ吾が乗る船もかくのごとき

か

333 物は皆無常の理示したる法と呼びても過たずとや

334 涅槃とは欲の火鎮める心にて寂靜なるは心安らか

サンサーラ

335 御仏はダルマと一つに成りたまひ衆生と共に輪廻重ぬや

九月三日

六波羅蜜

336 誰一人悩める民を救えずに、覺り顔なる小乗の僧

菩薩道

337 苦界にてもだえ苦しむ民おきて菩薩はなごて浄土愉しむ

一切皆空

338 一切を空とさとりて何事も囚われず生く風の如くに

唯識論

339 マナ識のその底にあるアラヤ識、幾億年の記憶の蔵かは

仏教的絶対平等

340 塵さえもウンチですらも御仏の慈悲の光に燦ざめくかな

九月七日(火) 台風十七号

二十一世紀の人間論の出发点

近代の終焉と人間観の転換

341 近代の終りに立ちて哲学よ歴史の意味と人間を問へ

択一論の本質論批判

342 考へて働きかけて遊ぶなりどれか一つを選ぶまじきや

墮罪と自我の自覚

343 禁断の木の実を取りて罪を得し人ははじめて己に目覚めぬ

- 344 対話と共生  
異質なる心と心隔てども語り合えれば共に生きなむ
- 345 近代知と理性批判  
近代の知のあり方を問ひ直し、理性批判に如何に応ふや
- 346 非有機的的身体としての自然  
人間の身体として捉えなば自然の心吾が心なり
- 347 本質としての価値  
価値こそは労働と物その区別止揚したるを倒錯なりや
- 348 労働本質論  
労働は内に住みたる抽象か、関わりこそが本質なるを
- 349 実践としての対象  
対象(もの)こそは吾が活動と捉えたる、物となり見、行つなりや
- 350 記号人間論の試み  
ある物が他の物指す性質が人間という意味の大きさ
- 351 人工機械人間としての国家  
国家とは人が作りし機械なり、それは強大なジャイアントなり
- 352 貝殻を含めて貝  
貝殻は貝の身よりも貝らしき貝殻含め貝と見做しき
- 353 認識論に逆転発想  
客体が主観に自己を定立す、認識論に逆転発想
- 354 「事的人間」論  
粉々に弾け飛び散るその刹那そのインパクト何を生み出す
- 355 二千年代の人間論  
ミレニアムはじまりの時人間を問い直してぞいざ生きめやも
- 九月十四日(火) 諸子百家の思想  
尊王攘夷
- 356 古の礼案復古行ひて天下整へ夷狄払はむ
- 357 仁とは何か  
人ふたり支えあつて生きるには、相手の気持を思ひやりたし
- 358 修己治人  
刑罰で人の心は縛られぬ、己修めて手本示せや
- 359 墨家兼愛  
汝が親の世話を頼むはいずれなる別愛の人兼愛の人
- 360 父子有親  
血を分けし息子に鞭を振るふのは立派に育ての親心なり



君臣有義

361 義のために君に従ふ臣なれば不義を行ふ君を諫めよ

夫婦有別

362 雌鳥が鳴けば社稷の滅びたり夫婦の別は忘れまじきを

長幼有序

363 若輩の上司が部下を横柄に扱ふならば人は得られぬ

朋友有信

364 友思ふ信(まこと)の心ありしなばなどと語らぬ血吐く言葉で

九月二十六日(日)

都市も人間なり

365 大都会ビルのジャングル見たるたびに、人なりこれもと嘆じたるかな

瞬間即永遠

366 雨上がり木の葉に光る露の玉その刹那にぞ生をつかむや

思想の構造構成主義的調整

367 マルクスとデューイ・サルトルそのいずれを選び取るなど愚にもつきまじ

三木清獄死の朝

368 疥癬をつつされ悶ふ牢の中三木逝し朝産声あげしや

369 三木逝きて悶えの声も静まりぬその苦しみを誰が背負うや

デカルトの魂置き入れ説

370 精巧な自動機械に魂を置き入れてこそ人となりしや

デカルトの心身二元論批判

371 魂を实体として捉えなば科学の高木根からくずれむ

対談人間論講座 アダムとエバの人間論

372 コスモスをつくりし神をつくりしは、救い求むる人のあがきか

373 一条の光さしきて闇照らす、愛がつくりしコスモスならずや

374 神々に似せてつくりし人ならば神は愛せり天使にまさりて

375 人のため世界つくりし神なれば、人に任せり地上の支配を

376 ムツゴロウ人の未来を示すため諫早湾に住み着きにしや

377 土くれを湧き出る水でこね回し命吹きいれ人をつくりし

378 終末に蘇りして楽園に入りなば待つや麗しき女(ひと)

379 見たままを音に取り替へ伝へても、認識までは伝へられまじ

380 吾が骨を取りて生まれし女(ひと)なれば、吾に帰れやいとこの

吾が娘(二)

381 欲望の蛇がいつしかとくへる巻き、罪にいざなつマンニユイの午  
後

382 智恵の実を食べてはじめて隠せしは性器ならずやかなし性さ  
がかな

383 何ゆえに人は隠すや秘めどころ、時来たりなば見せむがために

384 この罪は女のせいだと男逃げ、蛇のせいよと女はかわす

385 這い回り塵を喰らいて生き抜くは、神の裁きや蛇の自由や

386 呪われし土は茨を生え出だす、血と汗流しパンを求めむ

387 苦しみは土に返らば終わりなむ、塵故にこそ塵にかえらめ

388 各々が善悪知らば各々の正義の旗が戦始むや

389 今もなおエデンの園に居残りて帰りを待つや孤独なる蛇

十月十四日(木)

Sさんのつぎの歌に返歌を作りました。

今ははや、二十一世紀になりけり 使いしネタは七十年代 梅原  
廣松 疎外論

返歌

390 若き日に学びしことを捨て去りて、枝葉求めて花が咲くかは

391 生命の共生と循環説かずして、何を語るや統合の世に

392 事として世界と人を捉えたるその意味堵問はず新しきことな  
し

393 自らの疎外見つめよその中に新たな展開つかめるものを

ギリシア人の人間観

394 この問に常にかえりて苦悩するその言みが哲学なりや

395 死すべきは人の運命(さだめ)か、予め決意してこそ真に生くる  
と

396 本来が命の水のドリッピー、コスモスめぐり自らを知る

397 火と智恵を盗みし神よプロメテウス岩に縛られ内臓抉らる

398 パンドラに苦勞の種はつきねども希望を育て生きるが幸福

399 このパンがうまいかまずいかいずれかは人それぞれが尺度なり  
けり

400 獅子に牙鳥に翼を与えしが人に与える前に品切れ

やすいゆたか短歌集 401 ~ 500

欠陥動物論

401 生き残る力を持たず投げ出され、智恵と火ともて危機を乗り切る

プロタゴラスの人間論

402 謹みと戒めのない人間を生かしておけば国は滅ぶや

403 先を読む眼力だけで論じらめ人を刑するポリス加えよ

オイディプスの闇

404 順逆の道を歩みて迫りたるその闇こそは神も侵せじ

405 それぞれに口の闇を見据えてそ光に向かひて歩み始める

諸子百家続き

中国現代化で性善説破綻

406 助ければいくらくれると母親に掛け合う暇に子は溺れ死ぬ

羞悪の心のない子供たち

407 万引きの功を誇りて見せ合ひし、子らにはありや羞悪の心

荀子の性悪説

408 欲望で動くが人の性ならば、礼を定めて矯むにしかずや

無為自然

409 兼愛も別愛もなし無為の道、自然のままに生きるにしかず

大道廃れて仁義あり

410 大本の自然の道が失われ賢しらの道がまびすしいや

常有欲、以觀其微、

411 欲ほけは上つ面しか見えぬもの欲を離れて妙を知るなり

412 言の葉で言い表せば嘘になる一つになりて体で知れるや

道遥遊

413 生忘れ身の束縛を捨て去りて無心になりて道に遊べや

胡蝶の夢

414 わが夢で胡蝶になりて楽しみり人の身なるは胡蝶の夢かは

無可有の郷

415 節くれた樗伐られず大木に木陰に憩ふ無可有の郷

坐忘

416 仁義すら礼すら忘れ顔回は肢体やぶりて吾を忘れり

417 空見れば吾は空なり、海見れば吾は海なり海鳥の鳴く

本居宣長論

418 家庭では虫も殺せぬ良きパパが、修羅場に立てば百人殺すや

419 ますらをのきつとしたるはつくりもの、女々しく未練真情ならずや

420 世を憂う心なくては何事も胸に響かじ学なり難し

421 学成りて憂いの思い溢れても躬は治者ならでなすすべもなし

好信楽

422 好きだから信じて楽し何事もわが賞楽の道具なりけり

臥す猪の床

423 猪を無粋の極みといふなかれ臥す猪の床と言へばなつかし

つくりみやび論批判

424 無常こそもののおはれの元ならむ名残の桜ひとしお目に沁む

ルネサンスの思想

モナリザの微笑み

425 限りある命の壁を突き破りモナリザとなり永久に微笑む

ピコノの自由意志

426 自らの自由な意志と判断で人は成れるや天使にさえも

普遍論争

427 キリストがクロスにつきて贖いし罪の重荷を今も背負つや

マキャベリ

428 国民の利益を守る為なれば、神の教えも捉われまじきや

『痴愚神礼賛』

429 自らの痴愚に気づかぬ阿呆ども独善かざして狂乱極める

430 大工の子クロスにつきて人類の罪贖つは痴愚の見本か

431 痴愚なるが生まれつきたる性ならば痴愚を楽しみ生きるにしか  
ずや

432 法王が鎧兜に身を包み左の頬を差し出しに行く？

モラリスト

ク・セ・ジュ

433 何を知り何を根拠にいがみ合う、確かなる事何をか知らんや

考える葦

434 人ゆえに無限を知りぬパスカルは、葦のごとくに悲惨ならずや

435 考えることでコスモス包みたり、その偉大さを神忘るまじ

宗教改革

免罪符

436 鍋の底チャリンと鳴れば煉獄の父ちゃん飛び出しパラダイス行き

贖罪の十字架

437 トーラーを叶えることの難ければ罪贖えるイエス崇めよ

キリスト者の自由

438 定めゆえ人を愛するにはあらず、充たされし愛自由にあふる

万人司祭説

439 富築き天賦の仕事と証たるその首みが近代生みしか

本居宣長論

440 哀れなる物を哀れと思ひ知るその心こそ物の哀れか

441 山なれど山の愁いのありたれば啼き行く鳥も哀しかりけり

442 うつつへきまじむる宿れるサマリアリンの妻の首こそうつつき

きかな

王陽明、庭先の竹

443 竹切りてその切口を覗みつけ七日たてども理はみえざるや

陽明と宣長

444 吾が心、はてなき宇宙と一つなり、陽明・宣長同じ心ぞ

445 吾が思い届かぬものか木片に命の響き聴かましものを

446 草や木の枯れ折れる音を聴きてさえ、ものあはれは胸を刺せるや

ルネサンス科学

天動説から地動説へ

447 天と地を入れ替えてみて悟りしか宇宙の無限人のはかなさ

ベサリウス『人体構造論』

448 開けてみて五臓六腑は変らぬを如何に築きし文明の世

『ノヴム・オルガヌム』

種族のイドラ

449 何事も割り切りてぞ捉えたる人にありがち種族のイドラ

洞窟のイドラ

450 井の中に籠りて世間狭くする己の洞窟抜け出し海へ

市場のイドラ

451 運命といふ言の葉に惑わされ運命信じて未来なくせじ

劇場のイドラ

452 権威ある学説なれど己が眼で確かめるまで信じまじきを

哲学入門

453 ほん苦き青春の涙なめしより問ひ初めしかは生きるといつこ  
と

方法的懐疑

454 果てしなき懐疑の末にたどり着く「懐疑する我」確かなりしか

近代的自我と身体的個人

455 禁断の木の実を食へしその日より自我の自覚は生まれたりし  
か

456 この身にぞ考える我ありし故愁い哀しみこの胸を打つ

モナド市民

457 窓もなき自己にひたすら閉じこもるモナド市民か我も同じき

パスカル、中間者

458 悲惨なり偉大でもありその間もがきて生きる人間なりけり

カント、構成説

459 自らの感覚により構成すコスモスもまた己の姿か

年末・年始雑感

460 酉年も鶏飛ばぬか囁に向けて飛ばしぬいらだちの声

461 梅原の哀しみ求め年は経ぬ吾が哀しみも極まれるかな

462 病院の診察室の前で待つ裁きを迎える犯人のこと

463 黄色なる検査しめがけ尿飛ばす刹那に浮かぶ濃き緑かな

464 めでたさはとし経ることに新たなり層蘇は控えて夢を忘れめ

465 時廻り生まれし干支に戻りたり熱き想いの未だあせぬど

467 年明けて未だ白紙の年賀状賀の言の葉を探しあぐねて

4 生得観念としての神

468 完全な神という名の観念を不完全なる我、つくり得ざらむや

5 主観・客観認識図式

469 客観の事物に己の情念を置き入れまじき理を知りたくば

6 物心二元論

470 魂は頭のとっぺん主座にして巡れる情報巧みに読み解く

1 スピノザの汎神論

471 永遠の相の下にて眺むれば塵芥すら神の現れ

2 ライブニッツのモナド論

472 窓なくて自己関心に閉じこもるコスモス映じて調和に生きるのぞ

3 ロック・パークリー・ヒューム

473 観念が生まれし元は経験や事物は畢竟感覚の束

社会契約とは何か

474 個人あり生き残るためあいともに契約むすび社会つくりし

自然状態ははじめから戦争状態か？

ホッブズ

ん 475 人が皆野獣のごとく牙むかばリヴァイアサンをつくりて守ら

ロック

476 お互いに言と人格認め合い仲良く生きるが自然状態

かな 477 貧富の差生まれて互いに侵し合う修羅の世とぞはなりはつる

ルソー

478 土地区切り、剣を持ちて争える、農耕・冶金が不幸の元かは

リヴァイアサンの絵

479 巨大なるジャイアントなり村守る、瞳凝らさば無数の人あり

480 各々が欲望機械の人なれば、集まりつくれる国家も機械か

ロックの道具としての国家

481 主権者に信じて託せり統治権、耐え難ければ革命に起つ

ルソーの『社会契約論』

482 諸人よ私利私害はさておきて、皆の幸こそ共に語らむ

483 激論を交わして決めし一般意志(のり)ならば、守り抜くこそ真の自由か

フランス啓蒙思想

484 古き世の迷妄絶ちて照らしたす科学で拓く進歩の時代

観念論とは何か？

485 対象となりし事物は感覚と思惟が作りしものにあらずや

『純粹理性批判』

486 ものごとをそれは何かと見極める理性は神に及びうるかは

認識論のコペルニクスの転回

487 感覚をカテゴリーにて統合し構成したるが事物なりしか

感覚の形式としてのカテゴリー(範疇)

488 物はみな時空の中に現れぬ、そは感覚のカテゴリーかは

『実践理性批判』その1 道徳性とは何か？

489 欲望や利害を求めて行へば、法に適へど道徳性なし

490 よき事を好みてすればなれども、いやいやすれば道徳性あり

『実践理性批判』その2 定言命法

491 自らがなすべきことを決するに、たれもがなすべきことをえらへや

『実践理性批判』その3 目的の王国  
492 たとへ身は手段の王国(くに)にありとも、魂(ユリシ)は常に目的の王国

『実践理性批判』その4 道徳の要請としての宗教  
493 たとへ身は現象界に朽ちることも永遠(とわ)の魂清らに輝く

フイヒデー自我(絶対我)の哲学  
494 屈辱の亡国の世にドイツ人自我に目覚めて祖国築けや

シエリングー 美的観念論とロマン主義  
495 ローマンなパトスによりて我と汝(なれ)この断絶をいざ乗り越へむ

ドイツ観念論哲学の完成者ヘーゲル

496 古き世の終わりを告げて馬(うま)上(の)りゆく世界精神まばゆく光る  
即自 対自 即且対自

497 丸裸(まるはだ)生まれたままは人(ひと)なれど、己(おのれ)を知らずまだ即自(即自)なり  
498 世にもまれ己(おのれ)をみつめて人(ひと)として自覚(じかく)を得たらば対自(対自)なるべし

499 人の世(ひとよ)の間(ま)と光(ひかり)を知り尽くし己(おのれ)の道(みち)行く、即且(即且)対自(対自)や

自由の発展としての世界史  
500 自ら(みづか)が生きし時代(とき)に行き当(あた)る課題(課題)を果(は)たすが自由(じゆう)なるかな

## やすいゆたか短歌集 501 ~ 600

ヘーゲル弁証法のイロハ

501 花(はな)なれど蕾(つぼみ)のまま(まま)で咲(さ)かぬなら、花(はな)を花(はな)とは呼(よ)ばれぬものを

502 人の世(ひとよ)の矛盾(むじやく)見据(みよ)えて、発展(はつぜん)の道筋(みちすぢ)つかみ熱(あつ)と光(ひかり)を

家族・市民社会・国家

503 愛(あい)いと(と)しさに自然(しぜん)の契(けい)りに結(むす)ばれて作りし家族(かぞ)、愛(あい)の人倫(にんりん)

504 糧(か)得(と)むと業(わざ)の一つ(ひとつ)を分(わか)ち持(も)つ、市民社会(しみんしゃかい)は欲(ほつ)の体系(ていけい)

505 争(まが)える市民社会(しみんしゃかい)を調整(ていせい)し、理性(りせい)で築(た)く人倫(にんりん)の国(くに)

イギリス功利主義(十八世紀~十九世紀)

506 勞(らう)惜(せき)しみ時(とき)を惜(せき)しんで最大(さいだい)の利(り)を求(もと)むるが功利主義(こうりしぎ)かな

アダム・スミス(一七三二~一七九〇)

507 嘆(なげ)けるは億(いっ)千万(まん)の民(たみ)の死(し)か身内(みうち)の不幸(ふこう)そはしかざるや

ベンサム(一七四八~一八三三)

508 快(かい)求(もと)め苦(くる)を遠(とほ)ざける本性(ほんせい)は人(ひと)を支配(しはい)す二人(ふたり)の主權者(しゅけんしや)

509 人(ひと)は皆(みな)平等(びやうとう)なれや求(もと)むるは最大多数最大幸福(さいだふすうたふ)



- 510 J・S・ミル（一八〇六～一八七三）  
幸福は我が身にあるも他人事も厳正中立ナザレのイエスか
- 511 実証主義と進化論 1 コントの実証主義  
神祭り、理念掲げたその後の、実証の時栄えの世かな
- 512 進化論と有機体説  
環境に伴いその身も変わらねば滅びる定めが進化を生めり
- 513 もろともに社会も国も進化する十九世紀はダーウィンの世紀
- 514 科学的社会主義  
マルクスの三つの源泉たずぬればヘーゲル・スミスにフレンチ  
レッズ
- 515 若きマルクスの疎外論  
資本家も己が疎外の姿なり、すべては主体のあり方に帰す
- 516 文明を作りし罰がプロメテウス岩に縛られ内蔵抉らる
- 517 嵐をも巻き起こしたり温暖化わが身に返る疎外ならずや
- 518 『フォイエエルバッハ・テーゼ』  
対象(もの)すらも実践として主体なり、西田ヒツクリこれぞマルクス
- 518 実存主義  
何々と規定されたるその前に吾自由なり己を選ぶ
- 519 反省は猿もできるぞ「哲学者」、解釈のみで変革忘るな
- 520 唯物史観の成立  
存在に生みだされたる意識なり、意識が存在生むのではなく
- 521 経済の根っこが有りてその上に政治文化の花が咲けるや
- 522 史的唯物論の定式  
生産の力が伸びて桎梏になりし関係滅び去るのみ
- 523 剰余価値理論  
働かぬ人の分まで働いて、搾り取られて身も痩せるかな
- 524 一日の生活費だけ働いて、はいさよならではおとといおいで
- 525 物化・物象化(物件化)・物神崇拜  
商いの品物の同士が人として関わり合つのは神秘ならずや
- 526 労働が生みし価値が自立して資本となりて我を苛む
- 527 人と物その区別にそこだわりて価値はつかめぬマルクスの穴

ゼーレン・キルケゴール

キルケゴールの大地震

529 神呪い不義犯したる父なれば、吾呪われし罪の子なるを

530 張り裂けし思いも知らず咎むるや乙女心を弄びしと

主体的真理

531 そのために死ぬことをすら吾願ふ主体の真理吾は知りたし

実存の三段階 美的・倫理的・宗教的

532 若さゆえ美と快楽に酔いしれどやがてむなしき朝迎へむ

533 身に負いし荷の重さゆえ甲斐ありき己の非力知りてはかなし

534 人は皆神より離れ罪にありその絶望にあがき苦しめ

ニーチエ

アポロンとディオニソス

535 民衆の生のエナジー昇華して現れいずる造形の美

超人への橋梁(綱)

536 憧憬の矢を放たなむ彼の岸へ没落ながひ過渡(か)を超へなむ

神は死んだ！人間が神を殺したのだ。

537 しがらみは隣人愛の十字架か釘打たれては挑み得ざりき

能動的ニヒリズム

538 罪に墮ち神を無して生きしなら、己の旗を掲げて進めや

永劫回帰

539 神なきに為・価値・意味を持たざりきノスモスはただ永劫回帰か

精神の三態変化

540 荷を背負い力をつけしその上で、否定叫びて、創造に戯むる

二〇〇五年四月

ファンタジー 人間論の大冒険

第一話 鉄腕アトムは人間か？

541 親父ギャグ白けさせらる人なれど今懐かしきテンカ の臭い

542 人間に生まれしことの不思議さよ生きることの哀しみを

543 陽一はふと目覚めればアトムになり、ミミ核もはてサミットを

撃て

544 ロボットに生きる権利を認むるやコスト次第でスクラップと

545 人間も神が造りしロボなりや、進化できずに覇権失ふ

- 546 反抗の心を押さえしプログラム、たぎる怒りに固まりしまま
- 547 核ボール腹に収めて乗り込みぬ人とロボとのサバイバルかけ
- 548 神と人その関係を人とロボ移してみれば何が分かるか
- 549 己知る心を持ちしそれ故にロボも人なり哀しみを知る
- 550 人間は身体だけに限るまじ、物やメカにも心宿れり

第二話 ギルガメシュの人間論

- 551 陽一は砂漠で目覚め彷徨り、キャラバン隊長ギルガメシュと呼ぶ

- 552 暴君を倒してウルクの王となりシュメール治め並ぶものなし
- 553 エンキドゥ、ギルガメシュと戦えど戦士の哀しみ通いて抱けり
- 554 森の神フンババ殺し拓きたり文明の世の人の栄えは
- 555 森の神殺しし罪を贖いてエンキドゥ逝く我に代わりて

- つ 556 死霊住む地の果てにあるマルシュ山エンキドゥ求め我は旅立

- 557 洪水で生き残りし人たずねては不死の薬を求め還らむ
- 558 十五年経ちて還らぬそのときは、新王立てて栄え引き継げ
- 559 自らの限界超えて進み行く、そこに価値あり人として生く
- 560 ただ七日眠らすにいるそれだけで不死の妙薬手にせしものを

- 561 森焼きてこの手に入れし幸福も森なくしてはやがて費えぬ

- 562 日光の猿でもするや反省は、知恵寄せ合つて自然再生

第三話 エデンの園の人間論

- 563 土の塵神の姿に作られき命の息得てアダム生まれぬ
- 564 中央の命と知恵の二つ木の実にふれまじき命惜しくば
- 565 慰めに作られし獣アダム見て名口ずさめりな心のままに
- 566 神に似し人は支配を任されぬ欲に駆られて命絶やすな

567 吾が骨のつちより出て女(ひと)ならば吾に帰れや吾が骨の骨

568 アンニエーの園の唇下がり行き場失いとへる巻く蛇

569 善悪の知恵の木の実を口にして覆い隠せり裸の恥じらい

570 食べないと遊んでやらぬと言われしか女がなごごとふるはあさまし

571 何故にサタンの化身に落とされし石のライバル蛇にあらずや

572 労働は罪の報いか禁断の苦役は続けり塵となるまで

573 労働は自然に還る勤行か吹く秋風に胸を突き出す

二〇〇五年五月

第四話 オイディプスの闇

574 三叉路に気づきし時は投げ出され、口も知らず立ち戻すかな

575 アポロンの神の御殿のその門に掲げし言葉「汝自身を知れ」

576 三叉路に迷いし我を襲いたる杖持つ人よ果つるも運命か

577 謎かけて人身御供を求めたる曲爪乙女愛を知らずや

578 テーバイを救いし故に王冠と共に得たるはかくわしき女

579 甘菓子の匂ひの姫はめくるめく禁断の床知る由もなし

580 先王の仇を捕らえて取り除けテーバイを救ふ道ほかになし

581 感覚で人を欺き隠れたる言めてこそ見ゆまことの姿は

582 血を分けし子に殺さるる運命を避けむとライオスわが子殺めり

583 父殺し、母子相姦の予言避け離れし人は赤の他人ぞ

584 順逆の床に横たふイオカステ吾が妻にして母なる女よ

585 眞実を見れぬ眼はくりぬきてひたすらに観よオイディプスの闇

プロタゴラスの人間論

586 駄洒落にてはぐらかすのも弁論か、酔い回りなばさえも曇りぬ

587 数学や文字を教うるごとくして徳教得るや教え得ざるや

588 万物の眞理をはかる尺度とは人それぞれの感じとるまま

589 神々は土に水ませこねまわし火にかけ作りぬ生き物たちを  
 590 後悔は先に立たずや人にまだサバイバルする特性与えて  
 591 知恵と火を盗みて人にもたらしめプロメテウスは人を救えり  
 592 窃盗の罪を背負いて大岩に縛(いましめ)られて内臓抉らる  
 593 文明の内臓抉らる苦しみはヘラクレスならで解き放てまじ  
 594 神々にあこがれ抱く人なれば祭りて願ふ幸と平安  
 595 音節を区切りて作りし言の葉で人は築きし文明の世を  
 596 人は何故パンツ穿くやと問立てて栗本答えぬそれを脱ぐため  
 597 人間が作りし物も人間を語るが故に人に含むや  
 598 ポリスありはじめてながらふ人なればポリス語らず人は語れ  
 ず  
 599 つつしみと戒めの徳与ふべし死に値ふべし弁えなくば  
 600 ポリスをも人と捉える人間観、個々の市民はそれを構成す

## やすいゆたか短歌集

601  
 )  
 700

コーヒープレイク A 「人間論の穴」休憩室にて

601 どうせなら智子主演のバージョンでそれがだめなら拉致とい  
 つかも  
 602 ファンタジー古典を材に作りしが男ばかりが前に出るかな  
 603 電脳の中で演じるキャラなれば役とは知らず命張りたり  
 604 リアルには指も触れない二人でもバーチャルならば飽きかく  
 るほど  
 605 夢ならば天翔りたりリアルには自然のおきて抗ふまじきや  
 606 同じ夢繰り返し見て何時の日かなふと思ふも若き日の夢  
 607 リアルとは異なる世界つくりたる夢見る力人を作るや  
 608 言の葉は登録したるメモリイを記号に代えて組み合わせしか  
 609 死んでまた別の世界に生まれしか一度きりなる人の生かな  
 610 バーチャルを抜け出て現に戻りたる入れ子になりてそこもバ

ーチャル？

611 ただ一度生きるが故に夢に生き夢に死なむといざ桶狭間

612 試みに飲まず食わずにおりしなば、意識朦朧幻想もなし

613 それぞれの話につながりまるでなしいかてつけるや本のまとまり

614 ばらばらの人生生きる人でさえ口超えたる命引き継ぐ

615 フィクションでたとへ百年生きたれどリアルに戻ればたかが百分

616 読者をも穴に取り込み参加さすファンタジーを読む読者あり  
しや

617 精神の自由奪われ演技する役者にありや自我の自由は

618 有り得ない設定の中苦悶するその人物も幻想の人

二〇〇五年六月五日

筒井康隆著『虚航船団』の人間論

619 スペースと船に緊張をまみれむいれ目覚めてみるよ『虚航船団』

舞 620 脚まげて円を描くのはダサすぎるスックのばしてクルリひと

621 泣き疲れ我を忘るるばかりなり涙の中へと解き放たれむ

622 ゴキブリが知性体へと進化するそれはありだが文具までもが

623 文房具目、口、頭脳の欠けたればいかで思ひて物を語るや

624 漆黒の宇宙を旅する船の中ノーマルこそがアブノーマルかな

625 文房具身近にありしその故に、人キヤラ示すサインならぬや

626 アニミズム栄えし星は文具さえマイコンつけて心与えき

627 分業で文具になりしムービーが世代重ねて形定まる

628 文房具人と一つになりし故人の心は物の心が

629 ドライバー車の思考にならぬならいくつあっても足りぬ命か

630 十桁の数字が揃うと快感が揃って消えるくるめきの時

631 末梢の快に溺るる事なかれ、戦い忘れれば部隊滅びぬ

632 凶悪な蝕滅ほす聖戦は、口滅ほす戦いならぬや

633 環境や事物を含めて人間を捉え返すが新世紀かな

634 凶悪な欲望に生く融こそ衝動止まらぬ人の姿か

635 衝動と理性の断絶乗り越えてカタルシス生む夢の世界へ

「番外篇・哲学とはなんぞや」の挿入歌

ソクラテス

636 一つとして確かなことは知らざれど知に焦がれたる吾は愛知者

独断論批判としての哲学

637 独断を退けて立つ哲学も己過信し、独断に墮す

経験論の立場

638 実験と観察をもて確かめし事実の他に何が真理か

方法的懐疑

639 疑いの果てに行き着くその先の疑いし吾、疑い得ざるや

640 疑いしそのことだけは疑えぬ、そこから吾は導き得るかは

641 疑ひの闇路さすろふ吾ゆえに神の光の照らさで生くるや

完全者による支え論批判

642 お互いに欠けたる同士支え合い命の環結び生くるにあらずや

ロックのカテゴリー批判に関連して

643 踏みつけし石の中すら神を見る、神観念を持たざる証しか

644 経験を取りまとめてぞ生まれけむ物てふ観念、物も意識か

カントの構成説

645 感覚をカテゴリーにて整理して対象(もの)構えたりこれぞ認識

646 感覚でつくりし花も太陽も意識としては己が姿や

647 意識には現れ得ざる物自体故になきとは言われぬものを

648 感覚の束が事物と言ふものの、現れの元外にあらずや

可想界

649 この吾とかこめる世界(コスモス)あるならば、作りし神のあらざるまで

650 物知りて何なすべしか決めし故、その主体たる魂(ニコル)あらざるや

主観の実体性批判

651 考える過程と別に吾ありて思惟を生むとは絵空事は

判断の傾向性としての自我

652 経験を重ねしうちに判断の基準が生まれ、吾ありとせり

主体・客体

653 物事を客体として捉えるは、主体がありてその後のこと

動物的知覚

654 感覚に生理対応重ねつつ欲を満たせり本能のまま

人間の認識

655 人のみは感じた中身を述語づけ己の外に物を見出す

物的世界観

656 物立ててそを意識すとせしならば、意識以前に物ありきなり

物の営みとしての意識

657 物こそは意識の束とみなしなば、意識は物の営みともみゆ

認識論の逆転発想

658 認識を主観の行為と決め付けて、物の現れ気付かざりしか

659 人間の意識を生みて自己保つ事物の営み忘れざらまし

660 認識を物の側から捉えたる認識論の逆転発想

人間観の転換

661 人間を身体のみにかぎるまじ、事物含めた人間観へ

認識の倒錯性

662 意識をば物と見なして成立す、人の認識倒錯なりしか

物の意識

663 感覚は生理作用に違わねど物が己を刻みしものぞ

664 意識なく主体性なき客体が意識つくるといふは飛躍か

ものあはれ

665 吾が心怒り悲しみ決断す、そを生みしもの吾が身のみかは

社会的諸関係のアンサンブル

666 何背負い人は己を見出すや、重ね着したるかわりの中

667 網の目を泳ぎ渡りて可能性、花開かせよ一度の人生

構造主義

668 自由なる主体性など幻想か、構造知れど鬱に墮つれば

エラスムス『痴愚神礼讃』のパロディ

669 はじめての主役ふられて張り切るも痴愚女神ではちょっと惨めか

馬鹿天使

670 痴愚女神現れ出でたるそれだけで笑い転げてみんな幸せ



671 馬鹿を見て笑ろてる自分に馬鹿を見る馬鹿にこそある人のぬくもり

平和の訴え

672 エラスムス平和の訴え引っさげてモリアにまみえる大阪の町

673 馬鹿になり国家非武装選べるやそれとも利口に改憲すべしや

総理の靖国神社参拝

674 霊ありて社に集まる信仰を総理の名もてするはイケン（違憲）や

675 帝国の支配侵略犠牲者の御霊祀らず戦犯祀るな

野の花を見よ

676 野の花は華麗に装い咲きたるを何の不足もあるまじものを

自己疎外としての文明

677 便利さを求めて築きし文明に首絞められてもがき苦しむ

678 いまさらに原始の昔に帰れねど命の循環保つ工夫を

豊かな国の若者

679 豊かなる国に生まれし若者は怠惰になずむハングリー欠け

680 生まれ来る子の数減りぬその分を招き入れてぞ人手保たむ

増税で赤字が減るか

681 財政の赤字膨らむそれゆえに増税すれば赤字へるかは

682 増税は所得吸い上げ経済を停滞させて赤字まさずや

グローバル経済

683 統合の時代始まる、経済は一国単位時代遅れや

理性の自己疎外

684 人間の理性は痴愚の現われか、苦しみの因生み出すばかりや

痴愚が生んだ世界

685 本源の痴愚に帰りてまぐわいぬ、この世のすべては痴愚が生みしか

痴愚としての育児

686 子育てに若さと別嬪吸い取られそれで幸せ見上げたモリア

子供の痴愚

687 痴愚ゆえに可愛いものよ子供らは、悪態つかずに笑顔ふりまく

化粧癖

689 化粧品のおつまくなし塗りたくり、肌が荒れぬかそれが心配

シンプルがベスト

690 六七九シンプルな馬鹿でも分かる原理こそ成就の鍵ぞビッグな仕事

幻想に生きる

691 幻想とつめほねなしで生きられぬ、棺桶までも夢を忘れじ

老いらくの恋

692 老いらくの恋も元気のもとになれば責めたまふまじ見苦しいな  
ど

痴愚としてのキリスト教

693 一介の大工の息子が人類の罪贖つと言つはモリアか

『ヤマトタケル』

スーパ―歌舞伎の誕生

694 ケレンにてワクワクさせたその上の哀しみのあるせりふ胸打  
つ

熊襲征伐

695 ただ一人熊襲の宮に乗り込みてたはむけやはせし超人ありしや

原作者は柿本人麿か？

696 人麿はヤマトタケルに事寄せて皇国(くに)の篡奪明かしたる  
かな

持統天皇の心の闇

697 皇子たちのやさしき義母を演じつつ心の闇を彷徨えるかな

藤原氏の貴族官僚独裁

698 賢しらの知恵で治める藤の葉に惟神(かむながら)の道光絶え  
たり

荒ぶる神

699 吹き抜けし跡に残せる屍の山堆(つづ)たか(き)荒ぶる神や

民主日本と天皇の宗教性

700 天皇に祀られてこそ神となる皇国(スメラミクニ)か民主日本

# やすいゆたか短歌集 701 ~ 800

## 草薙の剣

701 雲寄する神の剣が勇ましきタケルとなりて燃ゆる野を刈る

710 念仏も忘れて商売励みおる尼の信心真仏土かな  
「およこの尼」

## 熊白樫の葉

702 若者よ命あぶるその口こそ樫の葉を挿せ命忘るな

二〇〇五年十月三日

## 「ヤマトタケルの大冒険」

## 熊襲・蝦夷征伐

703 戦いに果てよと曰(のたま)ふその代わり蝦夷の国くれると云  
ふ君

711 タケルなる強き男に抗つに弱き女に成るに如かずや

## 親の嘘

704 親も嘘、戦も嘘のかたまりや、真実求め闇を見据えり

712 父ならば死ねと言つなら死にもしよ言葉飾りて心隠すな

705 燃ゆる野に吾が名を呼びし君のため、死ねる幸せ歌に託せり

713 スサノオと剣とタケルは異なれりそを一つとはいかな回路や

706 天翔る白鳥なりやわが心まほら求め向かふはいはずぞ

714 燃え盛る火中に立ちて我呼びし、その幸せに何を惜しむや

707 君待ちて月経ちにけりそのあまり焦がるる想い衰すそ染しか

715 汝ははやタイタンの妃や水底に棲めるなまずの餌食ならずや

708 『穴の中の哲学書』  
ムツムロウ独居の穴に籠もりつつ誇り気高きムツ精神や

716 裳の裾に月立つとせば雅なり穢れの色に心ときめく

717 剣持ち震え上がらせたはむけるやがて剣に身を滅ぼせり

718 幾重にも山脈囲める大和なる吾がふるさとは国のまほらば

719 白鳥はいずこ目指すや天翔りいとしき女は他人の妻かは

- 720 法輪寺秘仏観たさに並んだが、見るものを呑む化け物ならずや
- 721 宣長は儒学だけでは収まらず面白ければ神も仏も
- 722 学問も吾が愉しみの具なるのみ花鳥風月それに同じか
- 723 鴨川の土手の夕日に稟と立つ京の女を永久に忘れじ
- 724 山なれば山のこころがありたるや、その心知るものあはれよ
- ツアラトウストラの人間論
- 725 大いなる命の知恵を与えんと山降り行くツアラトウストラ
- 726 人間を克服すべく何をした大地の意義に忠実であれ
- 727 平日に殺めしイエス日曜に甦りしか懺悔聴くため
- 728 天上の神は殺めりその代わり物を積み上げそを神とせり
- 729 人間のてっぺん挑み没落すさこそ望めり一度のいのちぞ
- 730 めくるめく奈落の上の一条の綱渡り行く没落願ひ
- 731 迫り来てヒラリ頭上を飛び越され墮ちいく先は地獄にあらず
- 732 闇の中五彩を纏て囁けり吾生きて跳び汝死して落つ
- や
- 733 戦後なる時代は熟れしわだつみの像もろともに砕けちりしや
- 734 労働と思考のいずれ根にありし鶏卵いずれ先立つ
- 735 労働が諸関係へと移りたる本質論の切断ありや
- 736 作られし生産物が疎ましく作りし人を苛みしかな
- 737 強いられし労働ならば作り出す物は吾が身に帰らぬものを
- 738 身体の器官としてはつながらぬされど吾が身よ抛りて立つ故
- 739 労働は糧得るための犠牲かは、己が力の発現ならずや
- 740 お互いを目的として結ばれしコミュニティにも疎外はありしか
- 741 疎外生むその根源が私有なら私有の起源は如何に説きしや
- 青年マルクスの人間観をめぐって2 『フォイエルバッハ・テーゼ』
- 742 遅れたる意識変えなば新しき世は来たれるかゲルマンの地に

- 743 眼に入る桜もヒルも客体が吾が行ひの姿ならずや
- 744 物質の底に実践置きたらば唯物論は崩れ落つるや
- 745 実践を事物と思ひ込みしなら事物も人の姿ならずや
- 746 物質を土台に置きし人ならばそのなお底に実践認むや
- 747 巨大なる類的能力疎外して神たてたるや絆なきゆえ
- 748 個々人の内にはあらめ本質は、人と結べる関わりにごそあれ
- 749 人なるは身にあらざりて行ひや、関わりとして事ぞ連ねる
- 750 音たてて崩れ行きしは何なるや吾が囚われし迷妄ならずや
- 751 様々に論じるだけでは暇つぶし、いび起きて言えむナロード  
(人民の中へ)と
- 幾多郎と琴の戀 対話篇
- 752 琴さんに逢ひたき想ひ切なくて夢の中にぞ愛対話篇
- 753 着古した丹前姿眼にうかへ学徒の胸の想い苦しも
- 754 湧き出ずる思想のあまりに難ければそを噛み砕くやうに難し
- 755 や 津田塾のスター教授を捨ててまで幾多郎がため尽くしまほし
- 756 や 何もかも捨て去りて吾無一物ただ自由意志命ずるままに
- 757 好きだけで仕事にすまじ哲学は狂気にも似た才なきならば
- 758 経済が全ての意志を規定せば人格自由は認め難しや
- 759 その刹那絶対の無に触れし折時は消えたり罪に死せりや
- 760 もしかして吾が身が辞書であるならば使われまほしやボロに  
なるまで
- 761 幾多郎は饅頭好きのそのあまり客の分まで知らず食いたり
- 762 石つぶて君投げるまじ罪人にやましきところ無きは無きゆえ
- 亡き母を悼みてつくりし歌4首
- 763 母逝きし知らせに兄の戸を叩く風の冷たさ身を切るごとくに
- 764 助けてと吾に頼める母死せり苦しみ消えし面美しく
- 765 母病みし羽曳野尋ね一人行く小学四年の吾の哀しみ

766 たれよりも母に甘えし吾ならば八十九歳の母の可愛き

対談 梅原文学の世界

767 人麿がヤマトタケルを書きたるや持統の闇に迫りたりしか

768 単身で熊襲に乗り込み首を取るこの勇者こそタケル名のれや

769 大和より蝦夷の国は大なるを二人で取れとは死ねとかわらじ

770 大八嶋 その霊として取り出せる 剣の御名は 天叢雲

771 燃ゆる火の火中に立ちて吾を呼ぶ君の言葉に命ささげむ

773772 弟姫の袖は乾かじ水底のタイタンの言やすらげくやは  
君待ちしその苦しみをたれぞ知る吾が裳の裾に月立ちにけり

774 何ゆえに神なる剣置きたるや嬢子の床の辺名残惜しさに

775 まほろばの大和の国に帰らなむ、雲居起ち来る吾が家の方へ

776 白鳥はさらに天翔け夢追ひぬ後追う媛に想いつなぎて

777 喪中の新年に  
友亡くし母亡くしたる新年に想い新たに生きむとぞ希ぶ

778 カワイイの言葉世界を包みたり肩肘張らずに自分らしさを

『ファンタジー 人間論の大冒険』

第一話 鉄腕アトムは人間か

779 ロボットと共に語る生きることに在ることの意味そして不思議を

第二話 ギルガメシュの人間論

780 フンババを殺して文明築きたるギルガメシュは吾が身ならずや

第三話 エレンの園の人間観

781 罪に墮ち樂園追われ勤勞の汗の中にぞ命に還れり

第四話 オイディプスの闇

782 眞実を見えぬ眼を抉り出し見据えし闇は神も侵せじ

第五話 プロタゴラスの人間論

783 戒めの徳を蔑する無頼者刑するポリス含みてぞ人

ラポール学園・哲学講座での講義レジメ

『評伝 梅原 猛 哀しみのパトス』について

第一回(1)吾が身にのこる母の哀しみ

法然の哀しみ

784 何万遍仏に祈れどかなわじや父母は討たれて地獄さ迷ふ

猛一歳二ヶ月で母逝去

785 放蕩の恋にはあらし吾が命ささげまほしや証守りて

二人の母

786 ひたむきに吾慈しむ養母(はは)ありき吾生みし生母(はは)面影  
もなし

無意識の母

787 底深く沈められにし母ならばそれとは知れず吾動かしぬ

タナトスの母

788 母の死を吾は生きたり、吾の死を母は生くるや命めぐりて

789 哀しみを残して逝きし人ありきその哀しみを共に哀しめ

790 山折はひばりの歌を聴いて死ぬ吾に遺れり生母(はは)の哀しみ

『湖の伝説』

791 幼子を遺して逝きぬその前に溢るる想い絵にみなせりぬ

第二回 (2)怨霊が歴史を動かす

792 吾が胸の底に埋もれる哀しみの声聴こゆるや御寺に立させて

793 御仏の慈悲の光の和の御国建てまほしきに剣とるまじきを

794 誣告にて討ちし長屋の祟りならなどて祀るや太子の御霊を

795 人麿の今際の想い伝ふるや五首一組の万葉挽歌は

796 皇子たちに付きまといふるや黒き影持統の間に寄り添ふいとく  
に

797 人麿のヤマトタケルの継母は、継子の命狙いたりしや

798 人麿は平城の御門と身をあわせものあはれを共に語るや

799 怨霊を恐れ敬ふ習わしに大和の人の和の精神(こころ)あり

800 身を捨てて驕れる覇者を諫むるや和の国建つる基なるべし

# やすいゆたか短歌集 801〜900

## 第三回(3)大いなる生命の循環と共生

- 801 人麿が人麿歌集に集めたる歌は語るや和歌の生成
- 802 天照らし国照らす神何時のこと女神となりて微笑にしや
- 803 千年の都の芸術まもらむと杳掛の地に根城遷しぬ
- 804 幼子を抱きて立てる足許に鴨斃れおり「湖の伝説」
- 805 生母への思い抑えて三橋の絵画革命捉えきりたり
- 806 氾濫のごとく思いは溢れむや母なる東北目指し旅立つ
- 807 頼朝に追われ渡りし蝦夷ヶ島未開に戻りてユーカラ歌ふや
- 808 逝きたれどまた何時の日か戻り着て二十歳の春を讃え謳へや
- 809 大いなる命の輪をば見つけたたり、そを生きてこそ生命輝く
- 810 イオマンテ母の元へと戻る態、霊に戻りて人の姿か
- 811 鳥や蝶魚に成りて霊は往く、物にあらざる霊はなかりき

- 812 存在の現われとして意識なり、意識のみなる霊界はなし
- 813 梅原は海のごとしや哀しみの母を抱きて青くたゆとふ
- 814 恒久の平和誓いて捨てし武器、国滅ぶとも手にすまじきを
- 815 **やすいゆたかの「構造構成主義入門」**  
**第一章 信念対立を超えて**  
信念の対立超えて語り合い共に拓くや共生の道
- 816 マルクスを採れどサルトル捨てがたし時にデューイも心惹く  
かな
- 817 物質とはそも何なりや意識から独立とせばいまだ意識か
- 818 イエスなる男ありしか十字架に罪を贖い甦りしや
- 819 関心によりて異なる本質を処得させて大樹立つるや
- 820 自らの主体問いつつ今日の自己いかに選ぶや思案に暮れつつ
- 821 対象を効果によって規定するプラグマティズムは実在認むや
- 822 道具的理性は人を物にしてアウシュビッツのシャワー生みし  
や
- 823 事を為すその志高けれど事の結果の責めは避けまじ



聖徳太子の夢

- 824 縄文の森の民とも共存し和の国建てむ大和ますらお
- 825 御仏の慈悲の光に照らさむと菩薩太子が経講じけり
- 826 和を以って貴しとなす国ならば大和と書きてやまとと読ましむ
- 827 大きなる事を決すにあたりては衆と論ぜよ和の心にて
- 828 お互いに聖でもなければ愚でもない凡夫ならくは違えど怒らめ
- 829 環境と平和を守るそのために信念超えて手を携えよ
- 830 すめろぎは絶対の剣握れるやただまとまりの要にすぎずや
- 831 すめろぎは菩薩ならまし仏への帰依の心を収め取るには
- 832 天台の教え知らずに経を説く使いは空し長安の空
- 833 人も花もその哀しみも収めとり救いの露を与えまほしや
- 834 さす竹の君はやなきに火炎瓶投げつけられてホームレス哀れ
- 835 煩惱に染められてこそ煩惱を超えし涅槃が微笑みしかは

836 世の中やそろそろどうも煩わし仏に戻りて次生に備ふや

837 和の国を築く太子の志継ぎて山背皇位望めり

838 国ごとに武力で対峙続けなばカルトですらもハルマゲドンか

839 同じ神信仰したる同士ならなごて争つ共倒れるまで

840 異質なる思想、文化を組み合わせ大樹つくりて花咲かせみむ

哲学の誕生、自然哲学

倫理学とは何か

841 輪になりて生きる理(ことわり)示したる古今の人と苦悩分かたむ

哲学とは何か

842 物事を筋道立てて根っこから皆に通じる原理で明かせよ

最初の哲学者

843 アルケーは一体何だと尋ねたら水だと答えし人はターレス

数がアルケー

844 コスモスの調べ奏でるピタゴラス数的調和をアルケーとせり

土がアルケー

845 土こそは命と捉え返すなら土に還るは命の循環

アナクシメネス

846 風吹きて気が集まれば雨が降り、降り固まれば土になるらし

プシユケー

847 生命と魂なるは同じ意味古代ギリシアでプシユケーと呼ぶ

闘いの火

848 闘いの火こそ命の原理なれ、燃え生きてこそ輝けるを

四元論

849 四元が愛と憎しみ繰り返し永劫回帰の時を紡ぐや

パルメニデス

850 有らぬものケノンが有らぬといふのなら多様も変化もドクサ  
ならずや

851 有ることを生きることだと捉えなばまことに有るは命のみかは

ゼノン

852 飛んでいる矢が止どまりておりしなら主の御胸を射抜いてみ  
しょうぞ

デモクリトスのアトム論

853 コスモスをケノン、アトムにまとむれば、意味・価値・目的、  
無に帰むべしぞ

キリスト教

854 神の子も聖霊すらも神ならば神は唯一と言われぬものを

855 土くれや蛇を崇めて何とする神貶めなば審き避けまじ

856 忘するまじ神と交わせし約束は果たせぬならば漂白の民

857 何時の日かメシアの時が来たりなば悔い改めよ御国に入らむ

858 人類の罪を背負いしキリストはクロスにつけり永遠の時なり

859 たくに  
ダビデなる王の子孫に生まれきてメシアとなりしか預言の

860 荒れ野にて呼ばわる人の声聞かば悔い改めよ御国迫れり

861 トーラーを守るは至難の業なればメシアに頼みて命に預かる

862 隣人と神への愛に生きるなら永遠の今光り輝く

863 悪霊が追い出されたる光景を目に焼き付けて教団立ち上げ

864 三日目の蘇りまで予告してイエス目指せり神殿の庭

865 憎しみに愛で応える戦略でキリスト教はローマ覆えり

- 866 キリストの死の責任は誰にあるローマかユダヤ、イエス自身が
- 867 イエスこそ救い主だと認むるやただそれだけが新たな契約
- 868 父と子と聖霊なるは一つなりその理は神のみぞ知る

ソクラテスとプラトン

- 869 万巻の書を読みたれど如何せむ己知らずば無知にしかずや
- 870 お互いの無知を認めて学び合い、共に築かむ明るき世界

- 871 無知の知に導く対話罪ならば哲学の死や毒杯仰がむ
- 872 正義とは理性が欲を制御してやる気起「**して**」花を咲かすや
- 873 予め物区別するイデアありイデアなくして物はあるまじ

- 874 善美なる「**らし**」なければ何事も分かちがたくて定かならずや

現代社会講義  
経済のグローバル化

- 875 産業の日進月歩は止められぬせめて目指せや良きグローバル

- 876 アリストテレスのポリス的人間  
部分より全体が先それ故にポリスのために生きるが人間

- 877 リヴァイアサンとしての国家  
おそるべしリヴァイアサンが牙剥かばホロコーストの地獄絵巻か

- 878 国家の三要素  
土地ありて其処に暮らせし人有れど主権なければ国家生まれず

- 879 集団としての国家  
とりどりの社会集団とりまとめ利害を調整、国家集団

- 880 支配の道具としての国家  
公共のために装い資本家が働く者を抑える道具か

- 881 夜警国家論  
市場での自由な競争保障せば国家は夜警に徹すればよし

- 882 ケインズ効果  
出来立ての道路を明日は掘り返し作り直してケインズ効果

- 883 国民の家父長としての王  
国民の家父長が王だとは聖書の「**王**」にあるのや

- 884 ロックの統治論  
生きていく権利を守るそのために君に託せり統治の杖を

ホップズ『リヴァイアサン』

885 自然権社会契約説きながらリヴァイアサンで専制護持す

886 耐えがたき圧政あらば吾起ちぬ契約したるは何ゆえなると

全員参加の人民集会

887 持ち出すな自分の利害は柵に上げ、ただひたすらに皆の幸せ

888 法作る人が、権力握るなら、権力縛る法は消え行く

ポータン 主権概念の確立

889 分けられず壊されずして限られぬ至高の力これぞ主権

法治主義 rule by law

890 国王の気ままな政治防ぐため手続き確かな法で支配を

「法の支配 rule of law」

891 万人の理性が頷く道理ありそれに基づく法の支配を

『大日本帝国憲法』と『日本国憲法』

892 人権といふ言の葉もなかりけり法が認めて権利生ずる

人権宣言のあゆみ

893 人間であれば誰でも有したる権利叫べり人権宣言

『ワイマール憲法』 社会権の登場

894 せちがらき世になりぬれば生存の権利を国が手当せざるや

人権の国際的保障

895 人権の失われし国ならば大君の辺にこそ死なめと謳ふ他なし

そもそも憲法とは何か？

896 主権者が国家の意思の大綱を明文化せしそれが憲法

『大日本帝国憲法』との比較

897 日ノ本は皇国（すめらみくに）そ天皇（すめるぎ）のしるしめさるる神の国なり

日本国憲法の基本原理

898 国民に主権移して人権を守りて築けや平和の礎

象徴天皇制

899 すめるぎは神にあらねど人として尊る思いを語り得むるや

平和主義と日本の安全

900 国のため戦つことを放棄して、丸腰の国誇らかに謳ふ

# やすいゆたか短歌集 901〜1000

## 東西冷戦と日米安全保障条約

901 アメリカの核の傘にぞ守られて、不沈空母と呼ばれるかな

## 解釈改憲

902 戦わず武器も持たない国づくり、ただの夢想が魁なるかな

## 違憲判決

903 国守る自衛の権はありとても剣を取らずにいかで守るや

## 憲法第九条による歯止め

904 九条の歯止めなければ米軍の尻追いかけて戦場に立つ

## 自民党の第九条草案

905 自衛軍国際貢献旗立て地球狭しと戦火交える

## 1 地球環境とわたしたちの未来

906 温暖化太平洋の島国が海に没してそれで済むかは

907 年平均たった一度の上昇で熱波で数万死ぬこともあり

908 美しい水と空気に守られた奇跡の星よガラスの地球

909 開発を続けたければ環境を先ずは守ろう生き残るため

910 成層圏上ったフロンは分解し塩素・臭素でオゾン壊すや

911 汚れたる大気は風に運ばれて東の国に毒の雨降る

912 今日もまたギルガメシュはフンババを殺して森は砂漠と化せ

913 人類の罪を背負いてムツゴロウ未来を示し十字架につく

914 地球にもやさしくなければその人を人にやさしい人というま

じ 914 地球にもやさしくなければその人を人にやさしい人というま

## 2 資源・エネルギー問題とわたしたちの生き方

915 吹き渡る風の命をもらいうけ地球に優しい電気おこせり

916 限りある太古の命燃やすより今の命を慈しみ燃やさむ

917 夏暑く冬寒きこそ身に良けれ冷暖房の過ぐるは危うし

918 清らかな水と空気のその他に捨てるものなしゼロエミッション

919 原発は巨大なエネルギーもたらせど希望の光が減びのチョイスか

くすのき塾講演

持統天皇は怖い女か？

920 1 持統天皇と天照大神

日の神に己の想い託してや天孫降臨夢物語る

921 2 大津皇子の変

才劣るわが子可愛やそのあまり秀でし皇子を謀りし愚母かは

922 3 父中大兄皇子への愛憎

祖父・母の仇なるかな吾が父はその父のために吾身捧ぐや

923 4 持統天皇と高市皇子

御位に就かむとすれば恐ろしき闇の中より魔の手つこめく

924 5 不改常典(あらたむまじきつねののり)

親が子に御位継ぐはよけれども兄弟相続乱の因かは

925 6 持統天皇と藤原不比等

この人と並べて優る人ぞなき藤原の世の基固めぬ

926 7 柿本人麿の何が逆鱗に触れたのか

人麿は女帝の心を疑ひてヤマトタケルであてこすりしや

927 1 髪長姫物語

水底に光る仏をひろい上げ祈りこめれば緑の黒髪

928 2 光明皇后の不倫と広嗣の乱

帝には観音様に見えしかは玄昉と語る皇后の笑み

929 3 聖武天皇と遷都始末

この国はすめらみくにぞ朕が理想(あがゆめ)の実りの秋(とき)

ぞ今ぞ迎へむ

930 4 孝謙上皇と道鏡

朝廷の孤独地獄に喘ぎたる魂救ふに命惜しむや

イエス復活の謎

931 1 イエスの復活はデマゴギーか

イエスには子孫があるかどうかより復活したかが真の問題

932 2 イエルサレムへ

人の子はクロスにつくが運命でも復活信じいざイエルサレム

933 3 ガリラヤのイエス教団

トーラーによるのではなく人の子の聖霊によれ救いの道は

934 4 「命のパン」の教説 教団大分裂

血を飲んで肉を食へてや人の子の終わりの日にぞ甦りなむ

935 5 過越祭とメシアのパフォーマンス

過ぎ越しの祭りに日には我こそはメシアてふ人神殿に立つ

- 936 宮清めと悪霊払い  
「この宮は神の館ぞ物売りの市にはあらめ御技に障あり
- 937 7・イエスの挫折  
ダビデの子世々に王なりへフライの末にあらねば技も空しき
- 938 8 「最後の晩餐」 はりハーサル  
パンは肉ワインは血なり人の子の時迫りたり過ぎ越しの宴
- 939 9 墓に埋葬されたか  
白布に包まれ屍墓にあり、なれど三日目布はたためり
- 940 10 聖餐の儀礼は  
人の世の始まりしよりこの日より聖なる日ぞなし時は至れり
- 941 11 イエス復活のメカニズム  
聖霊の宿りしものと覚えたる目には見えたり復活の子よ
- 942 12 マグダラのマリアに現れた復活イエス  
マリア呼ぶ声聞きしとき園丁がいとしラボニに見えにけるかも
- 943 13 エマオに現れた復活イエス  
苦しみを受けて栄えに入りたると語る旅人パンを裂く時
- 944 14 弟子たちに現れた復活イエス  
主イエスの聖霊を受けその余り己を主イエスと違わざりしか
- 945 15 何故「主の聖餐」を行うのか  
パンはパンイエスの肉にはあらねども聖なる時よ嗚呼リッ  
イン
- 946 16 聖餐による復活仮説の意義  
大いなる命の廻り示すため命のパンに成りにけるかも
- 947 1 イエスは実在したか。  
ローマにもユダヤにもなしイエスなる受難を受けし男の証は
- 948 2 聖徳太子架空説の諸説  
蘇我氏の王朝ありきそのことを消さむと造作絵空の君や
- 949 3 『憲法十七条』は厩戸皇子の作か？  
明けぬれば弟に代わりぬ兄王は四六駢儷いかで綴らむ
- 950 4 厩戸皇子が『三経義疏』を書いたのか？  
尊きは智願の教へぞ法華義疏隋に送りし僧学ばずや
- 951 5 法隆寺釈迦三尊像光背銘文は後世の偽作か？  
蘇我氏の栄へ伝ふる法興の元号などて偽作に記せし
- 952 6 天寿国繡帳も後世の偽作か？  
天寿国天の向こうの国ならず阿弥陀浄土と違わぬものを

7 厩戸皇子の崩日は？

953 つま逝きぬ我も逝くべし天寿国その崩日は二つはあらで

8 天皇号は何時から使用されたか？

954 天皇と呼ばれし君の初めなる推古女帝か天武天皇

ヤマトタケル伝説

1 ヤマトタケルは巡察使か

955 まつろわぬ熊襲蝦夷を経巡りて言向けやわする巡察使かな

2 ヤマトは言霊の国

956 そなたには蝦夷の国をくれてやる兵も付けず死地にゆけとは

3 愛に生き愛に死ぬ

957 相模野に炎燃え立ち吾が名呼ぶ君の御声に命惜しまじ

4 裳裾の月

958 美しき夜を受け持つ美夜受姫その裳の裾に月立ちけるに

5 嬢子の床の辺に

959 草薙の剣を置きて伊吹山ヤマトタケルは荒ぶる神かは

6 まほろばの地

960 麗しきまほろばの地に帰らばや山のあなたのあの空の下

7 河内湖と白鳥伝説

961 聖丘に羽曳き白鳥飛び立ちぬ向かふはいずこ河内葛城

後編 神功皇后伝説

1 白鳥は食へられたか

962 白鳥は高額姫に食へられて娘にとりつき夢を果たすや

2 明日香へ駆ける少女

963 飛ぶ鳥はいずこへ姫をいざなふやはるか纏向日代の宮へ

3 筑紫政権と大和政権

964 身は逐われ筑紫の国にありとてもこころはしのに大和し思ほ

ゆ

4 熊襲より任那守るが先決

965 熊襲より任那守るが先決か神がかりして事を決せむ

5 姫ダルマと八幡神のいわれ

966 吾胎に居ませし皇子が指揮をとり宝の国を攻め取りにゆく

6 大和凱旋

967 降参と言われて兵は有頂天その隙を突き騙し討ちとは

大國主命について

1 大國主命も怨霊か

968 大いなる国を築きて栄えしし大國主も崇りの神かは

2 大國主は二世紀か

969 イワレヒコその曾祖父と同世代大國主は二世紀の人



- 3 因幡の素兎
- 970 罪に落ち傷に苦しむ素兎がまの穂綿でくるみ癒しぬ
- 4 死からの生還
- 971 死してなお母の願いの熱ければ甦りなむバージョンアップで
- 5 根の堅州国にて
- 972 根の国でスサノオのもとしこかれて王者の力身に纏ひたり
- 6 八千矛の神
- 973 八千矛の兵に優れるオオナムチ大国主の神と成れるや
- 7 平和で豊かな国づくりに
- 974 神々の会議で決まった国譲れ、はいそうですかとはいかぬもの
- 8 国譲りと出雲大社
- 975 勝ち誇る王者の宮よりなお高く吾を祀れや崇り懼れて
- 平城天皇の哀しみ
- 1 人麿は平城の帝に身を合わせ
- 976 人麿は平城の帝に身を合わせ、和歌を文化の華とはなせり
- 2 桓武帝への怨みを背負って安殿皇子は
- 977 安殿皇子、父への怨みを身に受けて、闇を恐れて安寝しかねつ
- 3 大伴氏は桓武帝の挑発に乗ったのか
- 978 大伴は何故に種継射殺すや鎧の紐も結ばぬうちに
- 4 大同元年の『万葉集』
- 979 家持がいにしえびとの言霊を万集めし永久に伝へや
- 5 親子の断絶
- 980 怨霊の祟りを呼びし遷都策平城京とて花は咲きしを
- 6 平城遷都
- 981 青丹よし奈良の都にかえらばや心ゆかしき万葉の故地
- 記紀の神々
- 982 神々の誕生
- 御恵み感謝の祈り捧げつつ崇らぬようと頼むのが神
- 983 天の御中主(北極星)の神
- 満天の星はめぐりぬ北天の動かぬ星をよりどりこころにして
- 高御産巢日の神と神産巢日の神
- 984 天を衝ぎ聳ゆる高木の結界で国生みたるや美斗の麻具波比産土の神
- 985 産土の神
- 諸々の命産みにし土ならば土に還りて命産むかは
- 伊耶那岐の命と伊耶那美の命の国生み神話

986 稲育ち陽輝きて山火噴く吾がまぐはひに賦活せられて

黄泉国

987 相見むと黄泉比良坂こえゆけど櫛投げつけて逃げ戻りこぬ

身禊

988 身禊して大禍津日を拭えるや直毘靈のはたらきにより

天照大神・月読命・須佐之男命の誕生

989 母恋し荒ぶる神は泣き喚き大海原の水も干れたり

天照神話のなぞ

990 天の日と巫女と鏡は三つにして一つなるかな天照女神よ

天照信仰と儒教および仏教の影響

991 剣より愛の光と暖かき慈悲で包める徳の支配を

誓約(うけい)

992 スサノオの十握剣アマテルが食べて生まれし神は女神か

天の岩戸

993 日隠れ絶望の闇襲えども笑い転げば光射しきぬ

八岐大蛇伝説

994 スサノオが八岐大蛇の尾を斬りて取り出す剣天叢雲

農業の神々

995 次々と口からこ馳走吐き出しぬ保食の神に穢れなけれど

大年神

996 正月の神は稔りを持ち来る恵方に向かいて門松立てむ

宇迦之御魂神と稻荷信仰

997 手を合わせいただきますと元氣よく感謝の気持ちで命いただ

神仏習合

998 一、役行者の修験道  
法力で鬼神たちを掴まえてこき使いたり役行者は

二、泰澄の白山信仰

999 白山の頂に立ち龍神の背に現らわるる観世音かな

三、行基菩薩と八幡神信仰

1000 八色の旗をなびかせ大仏の造立かなへと都へ入りぬ

# やすいゆたか短歌集 1001 ~ 1100

番号は1からにします。

## 四、神宮寺

1 神ですら苦界にありてあえぎたり、共に歩めり仏の道を

## 五、本地垂迹

2 日の神は大日如来におわさぬや神も仏のかりそめにして

## 「ネオ・ヒューマニズム」宣言

3 パンコンも花も月さえ取り込みてヒューマニズムを仕掛けたるかな

## サルカールのネオ・ヒューマニズムとの比較

4 安直に名づくるなかれイズムの名宗教カルトと人は指差す

## 三木清のネオ・ヒューマニズム

5 戦争に参画してぞ侵略の舵取り替えて東亜解放

## 「ネオ・ヒューマニズム」で通すのか

6 既にして手垢に汚れたネームでも転換の意気胸に響けり

## 人間的自然と環境世界論

7 目殺は目の身よりも目らしき目殺含め目と見做しき

## 認識論の逆転発想

8 客体が主観に自己を定立す、認識論に逆転発想

もの哀れを知る心 やまごころを考える

9 朝露の葉先にきらり光たるその刹那にぞ哀れ極まる

まごめにかえて 何故いまネオ・ヒューマニズムか

10 閉塞の壁に向かいて咆哮す、壁よ汝はわれにあらずや

## 1 アダムとエバの人間論

11 人間は神に象(かたど)り作られぬ見えざる神をいかに象る

12 アダムから作られしゆえアダムなり土より出でて土に還りぬ 59

13 楽園の中央にある二つ木は神のしるしか命とロゴス

14 鳥獣にキリン頸長猫はニヤオ見事名つけてアダム語生まれる

15 吾れアダム汝はエバなり今宵こそ吾に来たれや吾が肉

16 誘惑の蛇は二人の欲望が独り立ちしてとぐるを巻きしか

17 何ゆえの羞恥心や身を隠す恥部を覆うに木の葉とて無き

18 労働は神が与えし罰なるか己が命の輝きならずや

世阿弥の謡曲にみられる宗教思想

- 1 『藤戸』 英雄盛綱に騙し討ちされた漁夫
  - 19 海の道教えし漁夫の欺かれ龍と化わりて怨み果たすや
  - 20 『蝉丸』 父醍醐天皇に捨てられた姉逆髪と弟蝉丸  
聖なるか我が子を捨てて道端の乞丐ならしむ大御心は
  - 21 『砧』 夫への想いが強すぎて地獄で苦しむ女  
砧打つ音がいつしか法華経の読経となりて白道を往く
  - 22 『檜垣』と『姥捨』 女の魂は美と官能の地獄に永劫に苦しむ  
永劫にその魂は離れまじ白河の水更科の月
  - 一九一〇年一月二十一日と二十八日に京都の「ラポール学園」  
3 『三つのL(光・命・愛)』と人間
- はじめに「三つのL」の提唱
- 23 光・命・愛、教えの枝葉の違えども祈り求むる思い通へり
  - 24 仏教も基督教も異ならず命照せり愛の光で
  - 二、光を求める信仰
  - 25 光り出すものにはあらね檉の葉もつずに挿しなば光かがやく
- 三、大いなる命への信仰

- 26 生れ落ち瑣末なことに気を取られ年老いたりき花咲かぬ間に
- 四、命のパンの信仰
- 27 パンなればイエスの肉に成り難し、聖霊宿すはイエスの肉なり
- 五、自らの命を与える信仰
- 28 大いなる命の輪にぞ帰りたし命捧げて永遠よ輝け
- 六、命を与える信仰
- 29 祈りこめ命を捌きてふるまへよ饗宴の場に神はいませり
- 七、疎外と戦う宗教
- 30 家庭でも学校職場にいるときも我虚ろなり取り戻すは何処
- 八、愛を感じる宗教
- 31 吹きすさぶ嵐に遭ひて自然にもはげしき思ひありやとぞ思ふ
- 九、救世主ムツゴロウ
- 32 人間の未来示して贖罪のクロスにつけり聖ムツゴロウ
- 十、アブラハムの家族問題
- 33 腹痛め生みしこの子のためならと砂漠に追いたり兄イシムスエ
- ル
- 十一、愛の実践を活動の軸に
- 34 命への愛に生きなむ一筋に希望の光高く掲げつ

